

令和元年度（平成31年度）教育委員会臨時会会議録

【日時】 令和元年8月25日（日）

【開会】 10時00分

【閉会】 15時06分

【場所】 川崎市総合教育センター 第1研修室

【出席委員】

教育長 小田嶋 満

委員 小原 良

委員 高橋 美里

教育長職務代理者 岡田 弘

委員 中村 香

委員 岩切 貴乃

【出席職員】

教育次長 石井 宏之

教育委員会事務局担当理事 総合教育センター所長事務取扱 小松 典子

総務部長 亀川 栄

総務部担当部長 杉本 眞智子

学校教育部長 森 有作

庶務課長 榎本 英彦

庶務課担当課長 瀬川 裕

指導課長 細見 勝典

指導課担当課長 武田 充功

指導課担当課長 稲葉 武

指導課担当課長 濱野 雄功

指導課課長補佐 小嶋 健司

指導課担当係長 長島 泰子

総合教育センター総務室長 岩城 美由紀

カリキュラムセンター室長 鈴木 克彦

カリキュラムセンター担当課長 辰口 直美

カリキュラムセンター指導主事 伊藤 悦子

カリキュラムセンター指導主事 鶴木 朋和

カリキュラムセンター指導主事 松本 崇

カリキュラムセンター指導主事 永田 賢

カリキュラムセンター指導主事 石井 芳宏

カリキュラムセンター指導主事 伊藤 由佳子

カリキュラムセンター指導主事 岩崎 知美

カリキュラムセンター指導主事 越 有里

カリキュラムセンター指導主事 中野 正明

カリキュラムセンター指導主事 鬼頭 洋司

カリキュラムセンター指導主事 岡部 啓子

調査・委員会担当係長 長谷山 大介

書記 間山 篤史

【署名人】

委員 岡田 弘

委員 岩切 貴乃

(10時00分 開会)

1 開会宣言

【小田嶋教育長】

ただいまから、教育委員会臨時会を開会いたします。

2 開催時間

【小田嶋教育長】

本日の会期は、10時00分から16時20分までといたします。

3 傍聴 (傍聴者 126名)

【小田嶋教育長】

本日は、7月23日の教育委員会定例会にて、「川崎市教育委員会会議規則」及び「川崎市教育委員会傍聴規則」に基づき、傍聴人の定員を180人としましたが、以後、会議中に傍聴の申し出がございましたら、「川崎市教育委員会会議規則」第13条の規定により、許可することに異議はございませんでしょうか。

【各委員】

<了承>

【小田嶋教育長】

それでは、そのように決定いたします。

なお、「川崎市教育委員会傍聴人規則」により、傍聴する際は、議事に対し批評を加え、または、可否の表明や会議の円滑な進行を妨げるような行為は禁止されております。このような行為が見られた場合には退室していただきますので、御了承いただきます。

それでは、報道機関からの撮影の申し出がございます。報道機関に限り、ただいまから議事事項に入るまでの間、「川崎市教育委員会傍聴人規則」第4条ただし書の規定により、会議中の撮影などの許可をいたします。

4 署名人

【小田嶋教育長】

署名人でございますが、本日の会議録署名人は、「川崎市教育委員会会議規則」第15条の規定により、本職から指名いたします。

岡田委員と岩切委員をお願いいたします。

(令和2年度使用教科用図書の採択までの経過・採択について)

【小田嶋教育長】

それでは、議事に入ります前に、教科用図書の採択までの経過等について確認したいと思いますので、事務局から説明をお願いいたします。指導課長、お願いします。

【細見指導課長】

それでは、よろしく願いいたします。

初めに、本年4月23日に御承認いただきました「令和2年度川崎市使用教科用図書採択方針」について、再度、簡単に御説明申し上げます。

資料の1ページをごらんください。

「2 採択の基本的な考え方」の「(1) 採択の権限」でございますが、2行目、「『地方教育行政の組織及び運営に関する法律』及びその他関係法令に基づき、教育委員会がその責任と権限のもと、公正かつ適正に実施」いたします。

次に、「(2) 採択する教科用図書」でございますが、今年度につきましては、令和2年度に使用する教科用図書を採択いたします。

また、採択対象とする教科用図書につきましては、文部科学省が作成する教科書目録に登載された教科用図書のうちから採択するものといたします。

ただし、「学校教育法附則第9条」の規定によりまして、特別支援学校、特別支援学級におきましては、下段の枠内の※4にございますように、教科書目録に登載された教科用図書以外も使用できるとされておりますので、この教科用図書も採択できるものといたします。

資料を1枚おめくりいただき、2ページをごらんください。

「(3) 教科用図書の調査審議」でございますが、教科書目録に登載された教科用図書について、調査審議の観点に基づき、十分に行ったものでございます。

資料を1枚おめくりいただき、3ページをごらんください。

「3 教科用図書の調査審議」の「(5) 調査審議の観点」でございますが、教育基本法及び学校教育法の理念の実現に向けて、次の五つの観点から検討して、最も適切と思われるものを採択いたします。

資料を1枚おめくりいただき、4ページをごらんください。

1点目は、「学習指導要領との関連」、2点目は、「編集の趣旨と工夫」、以下、「内容」、「構成・分量・装丁」、「表記・表現」でございます。

資料を1枚おめくりいただき、5ページをごらんください。

「4 教科用図書の採択手順」でございます。(1) 小学校用教科用図書につきましては、8ページのフロー図をごらんください。こちらのフロー図①は、小学校における教科用図書の採択手順を示しております。今年度は小学校の教科用図書全てについて、当該フロー図のとおり進めてまいりました。

なお、高等学校並びに特別支援学校及び特別支援学級で使用する教科用図書につきましては、9ページと10ページにフロー図を示してございますので、適宜御確認いただければと存じます。

次に、これまでの調査研究、審議の経過について御説明いたしますので、11ページの「採択

スケジュール」をごらんください。

はじめに、本年4月23日の教育委員会会議におきまして、採択の手順、採択に係る諮問、審議会等委員の委嘱等について御審議いただきました。

これを受けまして、5月9日に第1回川崎市教科用図書選定審議会を開催いたしました。また、調査研究会でございますが、こちらは小学校の調査研究会、高等学校の調査研究会等をそれぞれ実施し、それぞれの研究会において教科用図書の調査研究を行いました。

6月14日から8月7日にかけては、広く市民の方々に教科用図書をごらんいただくため、総合教育センターなど8会場におきまして教科用図書展示会を開催し、404件の意見をいただいたところでございます。

7月8日、同月11日及び同月18日には、教科用図書選定審議会を開催いたしまして、調査研究会の報告を参考に教科用図書の審議を行いました。また、審議結果につきましては、教育委員会へ答申したところでございます。

次に、12ページをごらんください。

こちらは、先ほど御説明いたしました教科用図書展示会の来場者数及び各会場でいただいた意見の件数をまとめたものでございます。

以上が、これまでの教科用図書採択にかかる経過報告でございます。

一方、既に教育委員の皆様には、お忙しい中、教科用図書に何度も目を通していただいているところでございます。

また、教科用図書選定審議会からの答申や各学校からの報告を取りまとめた調査研究報告書、全ての教科用図書に関する調査研究報告書及び教科用図書展示会アンケートにつきましても、事前に十分に参考にしていただいているところでございます。

なお、アンケートにつきましては、内容を要約せずに、そのままの形でごらんいただいております。

本日は、小学校の教科用図書の採択に始まり、中学校の教科用図書、川崎高等学校附属中学校の教科用図書、高等学校の教科用図書、特別支援学校及び特別支援学級の教科用図書の順で採択をお願いしたいと存じます。

説明は以上でございます。よろしく願いいたします。

【小田嶋教育長】

ただいまの説明より、教科用図書採択方針に基づいた採択手順を確認いたしました。採択手順について、御意見や御質問等はございますか。

よろしいでしょうか。

【各委員】

<了承>

【小田嶋教育長】

それでは、これまでの経過等を踏まえて、小学校教科用図書、中学校教科用図書、川崎高等学校附属中学校教科用図書、高等学校教科用図書、特別支援学校及び特別支援学級教科用図書の順

に採択を行うことといたします。

報道機関の皆様方におかれましては、撮影はここまでとさせていただきますので、御協力よろしくをお願いいたします。

5 議事事項

議案第28号 令和2年度使用小学校教科用図書の採択について

【小田嶋教育長】

それでは、議事に入ります。

「議案第28号 令和2年度使用小学校教科用図書の採択について」の説明を、指導課長、お願いします。

【細見指導課長】

それでは、「議案第28号 令和2年度使用小学校教科用図書の採択について」御説明申し上げます。

議案書の表紙を1枚おめくりください。

今回、調査研究の対象となりました教科用図書一覧で3ページまでございまして、この中から令和2年度に使用する教科用図書の採択を行うものでございます。

なお、資料といたしまして、3種類の資料をお配りしております。

「資料1」は、教科用図書選定審議会が教科用図書の内容を審議し、取りまとめた審議結果⑦でございます。

「資料2」は、川崎の子どもが学習を進めていく上での視点でございます。

「資料3」は、調査研究会からの調査研究報告でございます。調査研究報告書⑥は、調査研究会による全ての教科用図書に関する報告書でございます。⑤は各学校からの報告を取りまとめた報告書でございます。

なお、⑦や⑥、⑤につきましては、先ほど御説明いたしました採択方針の資料8ページにございます、フロー図①に記載されている丸数字に対応した資料となっております。

当該資料につきましては、事前に教育委員の皆様へお配りし、採択に当たっての参考資料として活用されているものでございます。

説明は以上でございます。御審議のほど、よろしくをお願いいたします。

【小田嶋教育長】

ただいま説明いただきましたが、資料につきましては、これまで委員の皆様には、教科書の調査研究の課程で十分ごらんいただいているものと思います。

本日は、先ほどの説明や審議会答申書、調査研究報告書等を踏まえ、教育委員会独自で採択してまいりますので、委員の皆様のお意見をこれから伺ってまいります。

国語科の審議に入る前に、今回、私も初めて教科書採択のための調査研究をして、いろいろと

感じるところがありました。そして、採択のポイントになるだろうと思っ

ているところもありますので、少し述べさせていただきます。

今回の採択は、来年度から小学校の学習指導要領が全面実施を控えているということ、また、川崎ではかわさき教育プランにより、川崎らしい教育を進めてきているという点、その中で川崎の教育を進めていく上で、各教科で大切にしている視点として、今の資料の2に示してありますが、各教科の視点を二つないし三つポイントとして示してあります。そのようなことを頭に入れていただいて、各委員におかれましても調査研究していただいたことと思います。

その中で、ちょっと私なりに感じたところですが、今回の教科書全般に言えることですが、特に、主体的・対話的で深い学びが展開されるよう、子どもたちが学習の流れをしっかりとつかむための工夫がされており、活動もかなり具体的に提示されているということ。それは子どもたちにとって大変わかりやすくはありますが、また、逆に丁寧過ぎると感じる部分もありました。

また、生徒の反応や感想等の例示を示し過ぎている傾向があるかなというふうにも感じました。

教員が、さまざまな授業展開や評価の工夫などをしていくことは本当に大切なわけですが、そのような点からは、先生方も教科書に示されている展開に、ある程度縛られてしまう面も出てくるのではないかと、そういう点も否定できないと思いました。

しかし、川崎の先生方は、現在、経験の浅い先生の割合が大変高くなっているという現状や、また今回は小学校の教科書ということで、原則全教科を教えるということなども考えますと、若い先生方や専門ではない先生方にとっては、ある程度、授業の流れが明確になっているほうがよいという、そういう視点も必要になってくるというふうに思いました。

各委員におかれましても同じような感想を持たれたのではないかと思います、そのようなことも十分踏まえて、川崎の子どもや先生方の実態に応じて、全体的なバランスを総合的に判断しながら採択を進めていきたいと思

① 国語

【小田嶋教育長】

それでは、国語の審議に入ります。

資料2にありますように、川崎の教育を進めていく上での三つの視点と、また新学習指導要領やかわさき教育プラン、それらから派生する、それぞれの委員がポイントとして取り上げた独自の視点なども適宜示していただきながら、御意見を伺っていきたく

思います。

それでは、国語について御意見をお願いいたします。

岡田委員、お願いします。

【岡田教育長職務代理者】

私がまず口火を切らせていただきます。

ただいま御説明がありましたところを踏まえまして、議案28号の資料の2のところに、「川崎の子どもが学習を進めていく上での視点」、国語に関して三つ示されております。これを踏まえて、さらに学習指導要領の改訂で、国語科においては情報の扱い方というのが新設されたということがございます。

また、川崎のこれまでの教育、そこを踏まえた上で、国語に関しては、東書、学図、教出、光村、略称で読ませていただきますが、この4社が出ております。

これらを踏まえまして、具体的に言うと、例えば国語の教科書の中で光村なんですけれども、5年生のテキストを見ますと、これは全ての学年に共通するんですが、まず学習の進め方が最初に示されまして、続きまして、既習事項の確かめが出ております。これは5年生でございますので、4年生の学びを確かめようとするような記載がされております。そして、5年生で学習することというのが、そこに明確に示されているということでございます。

さらに、17ページでございますけれども、「読むこと」ということで、既習事項の確かめ、それから、読むことに向けての着眼点、言語活動のポイントが示されております。これは先ほど教育長がお話しになりました、本市のかわさき教育プランに示されております、「読書のまちかわさき」ですね。これとの関連性を見ていくということを中心としております。

今、かわさき教育プランのことを申し上げましたけれども、そうすると、実は図書館利用についての教材がこの光村には入っているということでもあります。

それから、「この本、読もう」というコーナーがございまして、それぞれの単元に関連した読書のすすめ等が示されているということでありまして、そこで挙げられている本も、具体的に冊数もかなりの分量を示してくれているということでもあります。

さて、さらに、情報の扱い方に関しては、「関係をとらえよう」などということでも四つの系統で示されております。

それから、それに関連しまして、5年生、6年生では、「考えを図であらわそう」という、主体的な学び、対話的な学び、深い学びにつながるようなものがここに示されていて、国語科がもつ各教科の共通であろうところのものが、しっかり意識されているということでもあります。

さらに、言葉に着目したときに、「カンジ博士〇〇」のコーナーとか、「漢字の広場」というようなところで、語彙を明確にしていく、語彙の学習に力を入れていくというところの助けになるものが明確に示されております。

それから、主体的に学習に取り組もうとするときに、先ほど申し上げました既習事項を確かめる、「学びを見渡そう」であったりとか、『『たいせつ』のまとめ』という付録が出ておりまして、単元ごとの大切なところを全てもう一度見直していくことができる。それから、さらに具体的に申し上げますと、例えば、4年生の下のところに「ごんぎつね」が取り上げられております。これは東書、学図、教出等、全て取り上げられているんですが、光村では振り返りの観点というところで、「知る」、「読む」、「つなぐ」というふうな三つの視点に立って、これを振り返っていくということが明確に示されておりました。

以上の点を踏まえまして、私は光村でいきたいというふうに思っております。

【小田嶋教育長】

ありがとうございました。川崎の教育の三つの視点を踏まえて、情報の扱い方ですとか、語彙指導の充実という点等からお話をいただきました。

ほかの委員の方はいかがでしょうか。

小原委員、お願いします。

【小原委員】

私が研究してちょっと感じているところですが、各社とも1年で学習することの見通しを掲載しています。教出では前の巻で学んだこと、光村では前の巻までの学びを掲載しているところ。学習の進め方に教科書の扱い方を掲載しているのは、東書、学図、光村、1年間の振り返りを掲載しているのは、学図と光村というふうに見ております。

また、先ほど岡田先生からもお話があった情報の取扱い方のところで、光村では4年生の上巻、アップとルーズで伝えるというところで、その前に練習の思いやりとデザイン、3年生の学びを確かめようとするところがあり、学習部分の後には情報の提示とつながっていて、つながりを考慮した教材の配列になっていると感じています。

また、東書では、言葉の特徴や使い方について理解を深めながら語彙を広げるという「ことばあつめ」、さらに、豊かな語彙を身につける「言葉の広場」というのがあって、各学年の教材の一つに言葉の学びを振り返る単元があって、各単元末には学習内容にかかわる話型や文型、言葉を取り上げているというところが特徴かなというふうに思っております。

採択に関してですが、学習過程の明確化とか、情報の取扱いとか、そういうことを考えるならば光村、語彙指導まで含めた全体的なバランスで考えるなら東書というふうに考えております。

以上です。

【小田嶋教育長】

ありがとうございます。光村と東書、それぞれの推薦の観点をいただきました。情報の取扱いですとか、語彙指導の重点、そのへんのところでの光村と東書という御意見でした。

ほかの委員の方はいかがでしょうか。

中村委員、お願いします。

【中村委員】

私は光村がいいと思いました。それは読み物としての教材の力とか、振り返る観点として、先ほど岡田委員もおっしゃっていましたが、「知る」、「読む」、「つなぐ」ということを明確に打ち出している点で、児童が具体的に考えやすいのではないかと思います。

それから、ダイバーシティについてですけれども、光村は特に配慮されていると思いました。どの教科書もダイバーシティということで、目の不自由な方のための点字が載っているんですけども、東書と光村には手話も載っていました。東書の場合は点字の凹凸がついていないんですけども、光村の場合は本物と同じように凹凸がついていましたし、手話もあって、いろんな方がいらっしゃる、その方と伝え合っていくということの大切さを理解するという意味では、光村が一番いいと思いました。

【小田嶋教育長】

ありがとうございます。中村委員からは、ダイバーシティという観点からの推薦で光村ということでした。

ほかの委員の方はいかがでしょうか。

岩切委員、お願いします。

【岩切委員】

重複になる部分は割愛させていただきますけれども、4社共通の教材がいくつかございました。第1学年の「大きなかぶ」、第3学年「もちもちの木」、第4学年「ごんぎつね」、第5学年「大造じいさんとガン」というのがございましたが、第4学年について、この「ごんぎつね」のものを比較させていただきました。

その中で、文章の後に書かれている設問で、どんなことを考えさせ、どんなことを習得させているんだろうという観点から比較させていただいたんですけども、東書さん、学図さん、教出さんは、どう思うとか、どのような感じがしますかという、こういう設問がある中で、光村さんが、その表現からどんなことがわかるかというふうに言われ、兵十がごんのことをあらわすときに使った言葉というふうな設問を掲げておまして、設問が言葉を意識したものであり、スキルを学ばせるような設問になっていたかなというふうに思います。

そういったことから、語彙習得、それから語彙指導の充実ということを考えて、光村がいいのではないかと思います。

【小田嶋教育長】

ありがとうございます。私自身も国語の教員として、言葉そのものを扱い学ぶ教科として、国語の語彙指導としての充実ですとか、言葉を根拠に読み取ったり、また言語感覚を養ったり、表現に生かしたりするというのを重要視してきました。

今、御指摘のありましたように、私もそういった点を重視して見ると、東京書籍は「言葉の力」ということで、読みを広げるためのいろいろな観点をうまく明示してあって、大変充実してわかりやすいなということを感じています。

光村のほうは、読みの観点として言葉を根拠にしているというところが大変評価できると思っていますし、「言葉のたから箱」というコーナーも有効かなというふうに思っています。

私も、総合的に見ると光村がいいかなというふうに思っていますが、高橋委員はいかがでしょう。

【高橋委員】

私も光村がいいと思っているんですけども、素晴らしい教材が多いですし、現状、学校のいろいろな他の教科との活動でも、非常に国語の教材を活用した授業がなされているような状況も拝見しておりますので、現状での光村のままでいいのではないかなというふうに思っております。

【小田嶋教育長】

皆様方の御意見をお伺いいたしましたが、光村ということで皆さん出てきておりますので、国語につきましては光村を採択するというところでよろしいでしょうか。

【各委員】

<可決>

【小田嶋教育長】

では、そのように決定いたします。

② 書写

【小田嶋教育長】

続きまして、書写の審査をしてみたいと思います。

では、書写について、まず御意見をお願いいたします。

高橋委員、お願いします。

【高橋委員】

私は書写の教科書については、学校図書と光村図書がよいと思いました。私自身も子どものときに習字を10年ほど習っていたんですけども、やはり毛筆を習う上で一番大事なのは、お手本だというふうに思っております。子どもがいろいろ学校で毛筆の活動をしたり、書き初めなどの宿題を持って帰ってきていること、そういうことを一緒にやっている中でも強く感じていることです。

学校図書は、ほかの出版社が書き初めのみで実物サイズのお手本を大体掲載しているのに対して、半紙に近いサイズのお手本が数多く掲載されており、その点が大変よいと思いました。

ただ一方、低学年の硬筆ですとか、毛筆活動の導入のところで、筆遣いなどの説明が少ないなというふうに感じました。

一方、光村なんですけれども、低学年の硬筆でも、3年生から始まる毛筆でも、指なぞりを取り入れていたり、猫のイラストを使って筆の動きを表現したり、子どもたちが筆運びや力の入れぐあいの強弱などを、わかりやすく覚えることができる工夫がされているというふうに思いました。

全学年を通じて、書写についてバランスよく学ぶことができるように感じたので、光村のほうが少しよいかなというところです。

【小田嶋教育長】

ありがとうございます。学校図書と光村を推薦していただきましたが、全体的に見ると光村のほうバランスがいいかなということでお話をさせていただきました。

ほかの委員の皆さん、いかがでしょうか。

中村委員、お願いします。

【中村委員】

私は字がとても下手なんですけれども、書写の教科書を見ていまして、私の字の下手な理由がわかりまして、とても興味深かったです。

字をきれいに書くためには、例えば、はらいや折れの角度というものがとても重要だというこ

とがよくわかりました。

そういう方向性とかについて、どの教科書も書いてあるのですけれども、光村の場合は、それが大きくわかりやすく書かれています。私は光村の角度によって字のバランスが変わっていくということが、とてもわかりやすかったのでもいいのではないかと思います。

また、それから、この資料7の光村のところにも書いてあるんですけども、毛筆での書き初めの手本として、言葉の数の多さとか、言葉がとても明るい内容でいいなと思いました。子どもたちが新年を迎えて気持ちを新たにしたときに、どちらかというと、子どもは「伝統」というような言葉よりかは、明るい気持ちで、「新しい風」とか、「将来の夢」とか、「友だち」とか、こういう言葉を書きたいのではないかなと思いましたので、そういう見本がたくさん載っている光村が私はいいいと思いました。

【小田嶋教育長】

はらいや折れの指導のわかりやすさと、書き初めの手本をポイントにして光村を推薦いただきました。

ほかの委員の方はいかがでしょうか。

小原委員。

【小原委員】

学習の流れで見ていたんですけども、教出が、「めあて」、「ためし書き」、「ここが大切」、「まとめ書き」、「生かそう」、「ふり返ろう」という学習の流れで構成しているところがありました。

また、光村は、学ぶ内容が一目でわかるような紙面の構成になっていて、「考えよう」、「確かめよう」、「生かそう」、「ふり返ろう」という学習過程で構成しています。

実際に書く活動なんですけれども、教出だと1年のところに水書用紙があったり、1、2年になぞり書き文字と、ためし書き、まとめ書きの欄があったりしております。書いて伝え合おうというページで学級新聞、思い出に残る言葉など。

学図では、ポスターや学級新聞、都道府県名、他教科と関連する活動があり、光村なんですけれども、やはり同じように他教科との関連を示した上で、横書きの書き方や新聞づくり、6年生では、漢字一文字で伝える自分だけの一文字を最後の単元として、自分の心を相手に伝える活動を取り入れているというのが特徴だったと思います。

採択に関してですけれども、光村、教出、学図の3社を考えています。

【小田嶋教育長】

ありがとうございます。各社を比較して特徴をいろいろ言っていましたけど、採択としては、光村、教出、学図ということですね。

岡田委員、お願いします。

【岡田教育長職務代理者】

国語のところで申し忘れたんですが、今回、私、見させていただいて、各社とも本当に工夫して教科書をつくっていらっしゃいました。

そこを踏まえて、書写でございますけれども、私は、学図、東書、光村がいいなと思いましたが、かわさき教育プランに照らし合わせていきますと、光村の6年生のところに「書写ブック」というのがついておまして、1年から6年まで学習したことを日常の中に生かそうということで、横書きの書き方であったり、原稿用紙の書き方であったり、手紙の書き方、はがきの書き方というようなもの、それから新聞の書き方の工夫、ポスターをつくる時の工夫というものが示されておりました。

これは、かわさき教育プランの書いて伝え合うことと書写が関連づけられているという、この点をもって、私は光村を採択教科書としたいと思います。

【小田嶋教育長】

かわさき教育プランとの関連も含めて光村を選びたいと。

ほかにはいかがでしょうか。

岩切委員、お願いします。

【岩切委員】

私も光村なんですけれども、左右という課題というのは全ての出版社で出ているんですけれども、光村の場合は筆順も書かれておまして、左と右というのは筆順が違うものですから、そういったことも踏まえてわかりやすいかなというふうに思いました。

それから、先ほど中村委員がおっしゃいました、書き初めのお手本の数なんですけれども、各社用意されてはいるんですけれども、光村は3年生から6年生までで10件以上あったということで、子どもたちが選べる状態にあるということと、あと、やはりあまり書写が得意ではない教師の方も、そういった意味では使いやすい教科書なのではないかなという意味で、子どもたちの立場、それから教師の立場から見て、いいのではないかなと思いました。

【小田嶋教育長】

ありがとうございます。全体的に光村という声が多いかなと思いますが、私も各社見させていただく中で、いろいろ本当に工夫されているなというふうに思いました。

先ほど、高橋委員がおっしゃいました、学校図書の半紙大の大きさのお手本ですね、それも大変有効だというふうに思いましたし、東京書籍と学校図書は、1年生の文字の書き出しのマスの中に、書き出しの部分を星印や矢印で示してあって、大変それも有効だなというふうに思いました。

全体的に考えて、私は国語科や他教科との関連で言うと、光村がよく工夫されているなということと、また、毛筆では穂先の動きが大変重要で、朱墨手本が載っているのは大変わかりやすく、どの社も示してあるんですが、それぞれの委員がおっしゃったような観点、それぞれ特徴があると思いますので、私も光村を推薦させていただきまして、全体として書写につきましては光村を採択したいと思いますが、よろしいでしょうか。

【各委員】

<可決>

【小田嶋教育長】

それでは、書写については光村を採択していきます。

③ 社会

【小田嶋教育長】

続いて、社会の審査に移りたいと思います。

では、社会につきまして御意見をお願いいたします。

小原委員、お願いします。

【小原委員】

社会ですけれども、川崎の子どもたちは社会科の学習を進めていく上で大切なことは、身近な社会事象を取り上げ、主体的に取り組めるよう、見通しや振り返りを大切に、問題解決的な学習、知識技能を活用することで、多面、多角的、多様な表現力、また、地域愛、社会参画する基礎を培う学習を重視していると考えています。これらを考慮して教科書を見ていきました。

問題解決的な学習や見通し、振り返りなどとして、東書では、学習の進め方として、「つかむ」、「調べる」、「まとめる」、「いかす」という展開で、時間ごとにこのマークとめあてが記載されていて、気づきを与える社会的な見方、考え方や小単元の学習に出てくる言葉の表示もあります。

また、学習問題も小单元ごとに設定されて、まとめる場面では、習ってきた言葉とともに再認識できるよう掲載されています。

さらに、選択、判断が示されている箇所を中心に、「いかす」の提示や発展補完的な内容を広げるといったものもあります。

教出なんですけれども、学習の進め方を、「つかむ」、「調べる」、「まとめる」、「つなげる」という展開を、時間ごとの問いと単元ごとの問いや追究に一貫性を保つ「次につなげよう」で、この流れを構成しています。気づきを与える学習の手引や、視点、方法を示唆する吹き出し、活用すべき知識や概念を示すキーワードもあります。

また、学習問題は、小单元ごとに「みんなで作った学習問題」として設定されていて、まとめる場面ではキーワードとともに再認識できるよう掲載されています。

さらに、学習指導要領に示された選択判断を具体化した学習場面でのマーク、広く深く学習する際の「ひろげる」というのを用意しています。

多様な表現力や言語活動を考えますと、東書に関しては、話し合いや地図作成のほかに、シーリング作り、壁新聞、提案文、関係図、ポスター、カードゲーム、4コマCM、プレゼン、ランキングなど、表現がかなり多彩になっております。それに伴う情報の収集、読み取り、まとめるといった技能を求めているように感じています。

教出も同様に、チラシ、標語、関係図、年表、すごろく、イメージマップ、ガイドマップ、リーフレットなど、多様な表現と、それに伴う技能を求めている感じです。

日文に関してですけれども、安全マップ、PRCMづくり、すごろくなどあるんですが、他社

に比べて少なく、話し合いの多い構成をしているというふうに思っております。

身近な社会事象ということを見点にすると、私が本の中で見ている限りでは、東書は川崎市がゼロ、隣接市の東京が3、関東で4、教出の場合は、川崎市が5、隣接市の横浜が4、東京都が3、神奈川県が2、関東が4、日文だと、川崎がゼロ、隣接市の東京が7、神奈川県が2、関東が4というふうに感じており、副読本の「かわさき」というのがあるんですけども、教育出版社が3年生の社会科の始まりというところで、比較的身近な横浜市を取り扱っていることや、川崎が載っている5年生の京浜工業地帯、6年生の踏切にかわる地下通路整備、多文化共生社会などを考えると、よい事例地を選択しているというふうに思っております。

採択ですけれども、私が推薦したいのは、問題解決的な学習や見通し、振り返りなどであれば東書、教出、多様な表現力や言語活動であれば東書、教出、身近な社会事象であれば教出といった考えになりますので、教育出版社でお願いいたします。

以上です。

【小田嶋教育長】

問題解決的な学習の進め方と、言語活動、また事例地、そういう三つの視点から各社の特徴を比較していただいて、総合的に判断して教育出版ということによろしいですか。

ほかの委員の方、お願いいたします。

高橋委員。

【高橋委員】

私は教育出版がよいと思いました。まず、小学校3年生の題材となる地域ですが、小原委員の言われたように、川崎の隣で似ているところも多い横浜市で1年間通す構成になっております。

それで、日文と東京書籍は、同じキャラクターがずっと出てくるんですけども、事例地がどんどん変わるので、最初、私が読んでいて、あれ、キャラクターが変わったのかなというふうに、ちょっと戸惑ってしまうことがありまして、子どもは結構こういう小さなことにひっかかって、話がすんなり入ってこないというようなことがあるのかなと思い、最初の導入でちょっととまってしまうようなお子さんがいるのかなというふうに感じました。

それで、6年生の歴史の教科書の導入についてなんですけど、東京書籍と教育出版が充実していました。特に教育出版は、その前に学んだ公民分野の参政権の話から始まっていて、歴史を全部学び終わった最後のまとめで、再度、参政権の歴史を取り上げて、歴史を学ぶ意味を子どもたちに考えさせるという構成になっていて、歴史という最初から最後まで一つの流れとして、とてもすばらしいというふうに感じました。

また、教育出版の5年生の単元の見出しなんですけど、未来を支える食料生産、未来をつくり出す工業生産といったように、未来に関する見出しになっていたり、文章の中にも未来志向、前向きな表現が非常に多く、社会という教科を未来のために学ぶんだという意義を、子どもたちが考えやすいのではないかと思います。

それから、歴史の付録で両開きになっていて、東書と日文さんは、表裏になっている年表が両開きでぱんと一連に見える、一目で見られるようになっていて、そのとじ込み年表も、非常にインパクトがあっっておもしろいなというふうに感じました。

以上の点で教育出版がよいと思いました。

【小田嶋教育長】

ありがとうございます。ほかの委員の方はいかがでしょうか。

岡田委員、お願いします。

【岡田教育長職務代理者】

「川崎の子どもが学習を進めていく上での視点」という、三つ示されている社会でございますけれども、それらを通して、私は日文と教出がいいかなというふうにまず思いました。

そして、今、小原委員と高橋委員がお話くださったんですが、教出の場合は、「つかむ」、「調べる」、「まとめる」ということと同時に、「この時間の問い」というのが示されております。そして、さらに、「次につなげよう」というふうなことでつながっていく。

それから、「みんなで作った学習問題」ということと、それから、キーワードや図示がされているということでもあります。

そして、かわさき教育プランということ考えたときに、先ほどの小原委員のほうから事例地というお話がありましたけれども、これで、「ともに生きる暮らしと政治」というようなところで、向ヶ丘遊園駅の地下通路整備に関してが掲載されておりました。それから、6年生の253ページのところなんですけれども、「日本とつながりが深い国々」のところでは、「多文化共生社会をともに生きる」ということで、「神奈川県川崎市では」ということで、外国人市民代表者会議を掲載しております。

これらの点も踏まえて、私も教出がよいと考えます。

【小田嶋教育長】

ありがとうございます。

中村委員、お願いします。

【中村委員】

アンケートも拝見したところ、社会に関する御意見がとても多かったです。やはり、多くの方が歴史認識とか、教育における政治的中立性ということをお懸念されているということがよくわかりました。

私も教育委員として中立公正であることが大事だと思っております、新学習指導要領により加わった点に特に注意して確認をいたしましたところ、川崎の子どもたちには教育出版で学んでもらいたいと思いました。

例えば、領土問題についてですけれども、教育出版には排他的経済水域の説明があります。なぜ領土問題が生ずるのかということをお考えられるようになっております。それは資料2の観点の二つ目にも書いてあるんですけれども、社会的事象の特色等を多面的、多角的に考えることにつながると思います。

また、領土問題がなぜ生ずるのかということをお考えるために、領海とか領空があるという知識とともに、「国にとって領土はとても大事だけれども、隣の国々とは仲よくしていきたいね」とい

う、先ほど高橋委員もおっしゃっていましたが、未来志向の書き方がとてもいいと思いました。

そのほかには、6年生の教育出版の教科書ですけれども、これからの日本という点では、日文と教育出版がいいと思ったんですけれども、特に教育出版では、「歴史の事実を忘れずにお互いの国を尊重し合って、さらに強い友好や信頼の関係を築いていくことが大切です」という書き方をしています。

「歴史を忘れずに」という点では、もう一ついいと思ったのは、6年生に書いてあるのですが、ハンセン病と人権侵害とか、障害者差別解消法などについても詳しく触れておまして、障害とか男女共同参画、人権についても、ちゃんと考えられる教材になっているということと、子どもたち自身が、「みんなで作った学習問題」というように主体的に考えられるという点で、教育出版がいいと思いました。

【小田嶋教育長】

ありがとうございます。アンケートも踏まえ、領土の扱いですとか、ハンセン病、障害者差別等のことも踏まえて、教育出版を推薦していただきました。

岩切委員はいかがでしょうか。

【岩切委員】

もう、皆さんが言い尽くされたところはございますけれども、まず、3年生での市、4年生が県、5年生が国というふうに見ていく中で、3年生の導入部分でやはり川崎市が多く取り扱われているという点で、教育出版がよろしいのではないかとこのように思いました。

ほかの学年のほうも拝見させていただきましたけれども、先ほど中村委員も言われましたが、戦争の記載のところで、やはり、「こうした歴史の事実を忘れずにお互いの国を尊重し合って、さらに強い友好や信頼の関係を築いていくことが大切です」とか、「周りの国々とも平和的で友好的な関係を目指していきます」という、前向きな捉え方をされているという点で、教育出版を子どもたちに推薦したいなというふうに思っています。

【小田嶋教育長】

ありがとうございます。皆さんが共通しているのは教育出版ということで、私も皆さんからの御指摘あったようなところは、教科書を読みながら感じておるところですが、やはり授業の展開のしやすさというところで、今、御指摘もありましたけど、2ページで見開きで、「この時間の問い」というのが左上にあって、その時間が終わると、最後は右下に「次につなげよう」という、どのページもこういう展開になっていて、大変子どもたちにとっても、指導者にとってもわかりやすい展開になっている。

そして、最初に「みんなで作った学習問題」というのが提示されるわけですが、また同じ問いがまとめの段階で繰り返されていて、初めに返って振り返りながらまとめができるということ。また、事例地のことも幾つかお話がありましたけど、川崎に近いところ、川崎が扱われている部分、そういったことも踏まえて、私も教育出版を推薦したいと思います。

全体を通しまして、社会科につきまして、教育出版ということでもよろしいでしょうか。

【各委員】

<可決>

【小田嶋教育長】

では、社会科につきましては、教育出版ということで決定したいと思います。

④ 地図

【小田嶋教育長】

続きまして、地図の審査をしてみたいと思います。

では、地図につきまして、御意見をお願いいたします。

岡田委員。

【岡田教育長職務代理者】

地図は2社でございます。東書と帝国であります。

資料2の「川崎の子どもが学習を進めていく上での視点」が三つ示されております。それらを踏まえたときに、東書は地図の成り立ち、地図記号や凡例、索引等が示されていて、同じく、帝国も地図の成り立ち、方位の活用、地図記号、縮尺の使い方等が示されておりますが、さらに、「トライ！」のコーナーで確認しているということがあります。

それから、主体的・対話的で深い学びにかかわる構成のところ、帝国は「地図マスターへの道」というものを示しまして、社会的な見方、考え方を働かせながら、調べたり考えてできるような質問が掲載されております。

また、50万分の1の地図、その土地の利用の様子を6色に分けて明示しておりました。ちなみに、東書は8色に分けて明示しておりました。

それから、かわさき教育プランに関連していくならば、日本の首都東京を5万分の1の縮尺で掲載しておまして、そこに川崎市や川崎の二ヶ領用水ですね。これが掲載されているということ、これらを踏まえまして、採択教科書は帝国がいいと思います。

【小田嶋教育長】

帝国書院を推薦していただいたというところです。

ほかの委員、お願いいたします。

高橋委員、どうぞ。

【高橋委員】

まず、2社の地図帳を見させていただいた率直な感想なんですけれども、どちらの地図もすごく情報量が多いなというふうに感じました。

他教科とのつながりなんかも考慮されているんだと思うんですけど、子どもが社会の教科で

地図帳を使うということを考えたときに、例えば場所を調べるとか、土地の高低差を調べるとか、土地の使い方を調べるといった地図のその基本的な使用を、子どもがしやすいような情報の量なのかなというのをちょっと考えるところがございました。

それぞれの地図帳によさがあったと思うんですけども、初めて社会科に出会う3年生の導入として、地図の成り立ちというのが、どちらも書かれていたと思うんですけども、東京書籍さんのほうが適切なステップを踏んでいて、だんだん小さくなっていくというようなステップを踏んでいて、ページ数も多くてわかりやすいなというふうに思いました。

一方、帝国書院さんは、地図の使い方の説明について、文字も記号もとても大きくわかりやすく充実していると思いました。また、地図の本体のほうなんですけれども、帝国書院さんは、田と果樹園に子どもが習う地図記号が使われていて、そういう習ったことがちゃんと反映されているということが非常によかったなと思えます。

それから、先ほど岡田先生が言われた、多分、東京周りの地図だと思うんですけども、開いたときに、色分けが帝国書院さんのほうが実際の土地の様子を感覚的に理解できるような色使いになっていて、非常に見やすいなというふうに思いました。

以上の点で私も帝国書院がいいというふうに思います。

【小田嶋教育長】

地図記号ですとか、地図成り立ちのわかりやすさ、また多分、関東地方の地図かと思うんですが、そこを比較したときに、土地利用の様子がわかりやすい、そういったことも踏まえて帝国書院ということでした。

ほかの委員の方はいかがですか。

小原委員、お願いします。

【小原委員】

3年生からの地図の利用ということを含めた上で考えました。3年から始まるということもあるので、地図の成り立ちや地図における約束の理解というところでいくと、東書では、「まちを上から眺めてみよう」というイラストの鳥瞰図から始まって、真上から見ると地図になるよね、地図になって、「市を見渡してみよう」のイラスト鳥瞰図と、10万分の1につながっていくという形です。

地図の3年生の配布ということもあって、2年生のまち探検から空間認識が想像できる力を必要とする接続を考えているのかなというふうに思っています。どのページもキャラクターが気づいたこと、問いにわかったことが記載されていて、子どもたちの理解を促しているというふうに感じます。

一方、帝国では、まず「学校を上から見よう」で、写真と地図で上から見た土地をわかりやすく書いたものという視点の違いから入って、「もっと広い範囲を見てみよう」で、学校の周りから実際のまちへと視点を広げ、俯瞰表現絵図と平面の地図を比べることで、違いの理解を促しているというふうに思っています。

説明に関しては、9ページから18ページまでかなりのページ数を割いて、丁寧に説明が入っていて、ページを多くとって身近な学校から視野を広げていくというような工夫で、2年生から

の生活科からの接続ということも考えていると。かなり丁寧につくっているというふうに感じております。

また、資料活用などで見てみると、東書のほうは、「地図の冒険に出発」という、世界と日本の特色をイラストで示した地図があって親しみやすくしています。

一方、帝国のほうも、世界発見があって、英語活動にも使える形になっています。

情報の読み取りやすさで見てみると、東書のほうは、広く見る地図、地方別に見る地図、詳しく見る地図の三つで構成されていて、縮尺は4種類。掲載している各ページの地図には方位や縮尺以外に、1センチ当たりの実際距離を示しています。100万分の1の地図には、陸の高さ、海の深さ、50万分の1には用途別の土地利用の色、100万分の1、50万分の1、どちらの地図にも農産物、海産物、水産物などがイラスト表記されているというところ。

一方、帝国では、大きく分けて広く見渡す地図、都道府県を見る地図、詳しく見る地図の三つで構成されていて、その中で、11種類の見やすさを優先した縮尺構成になっているように感じています。掲載する各ページの地図には、方位や縮尺以外に1センチ当たりの距離を示しているのは東書と同じですけど、方位は上が北になるようなレイアウト、それで500万から50万分の1までは土地の高さ、海の深さ、用途別の土地利用色が表示されていて、30万分の1から50万分の1の地図には名所、旧跡、工場、観光スポットのイラスト、広く見渡す地図では情報量を絞っているかと思うんですけども、都道府県名、名産、観光地のイラスト、交通網などを見やすくして、発達段階を考慮しているのかなというふうに思っております。また、土地の高さの色分けだと思うんですけども、土地の高さの色分けにも、恐らく陰影と輪郭があって、見やすくなっているというふうに私は感じています。

採択の候補ですけども、私は帝国書院を考えています。以上です。

【小田嶋教育長】

さまざまな観点から二つの地図を比較していただいて、最終的には帝国書院ということでございました。

中村委員、お願いします。

【中村委員】

私は2点から帝国書院がいいと思います。1点目は、学校の先生方のこの資料にも載っているんですけども、やはり川崎で教えるからには、川崎の位置がわからないと困る。20万分の1の地図で、東京から川崎、次の横浜まで出ていますので、川崎というのはどういうところなのかということが一番わかりやすいです。やはり先生方もそれが一番教えやすいのではないかなと思いました。

2点目は、地球儀のような見せ方がとてもいいと思いました。地球は丸いということがわかりやすい写真というか、絵になっているんですね。例えば飛行機でヨーロッパに行ったりするときに、横に飛んでいけばいいような気がするけれど、北のほうを回っていきますよね。それは、地球は丸いからで、横に飛んでいくよりかは、上のほうを飛んでいったほうがいいというようなことを、こういう地球儀の形をしているとわかるのではないかなと思ひまして、この2点から私は帝国書院がいいのではないかなと思ひました。

【小田嶋教育長】

二つの点から、中村委員も帝国書院を推薦いただきました。
岩切委員どうぞ。

【岩切委員】

私は、あまり地図を読むのが得意ではなかったので、子どもの視点になって、この地図を拝見させていただきました。この地図は、3年生で配付されるということから、まず子どもたちが興味を持てるかどうかという視点で拝見させていただきましたけれども、両社とも都道府県に興味を持ったり、あるいはその特産物がどういうものであるかということが理解しやすかったり、それから来年オリンピック・パラリンピックが開催されて、そういったことに興味を持った子どもたちが、これまでの開催地はどこかなということを見るということも両方とも掲載されておりました。

そういった意味で、どちらも本当に甲乙つけがたかったんですけども、先ほど来、皆様からお話があったのですが、川崎の場所、それから位置、そして詳細な情報という意味では、帝国書院さんのほうが、東京都とその周りというページの中で川崎を網羅されている20万分の1の地図を掲載されているというところに、やはり非常に使いやすさと子どもの興味の持ち方というものが強化されるのではないかなというふうに思いました。

それから、岡田委員も話されていたんですけども、さらにその先、発展的なところという意味でも「地図マスターへの道」というのもよく読むと、その先どんなことを学んでいくのかという意味でも、非常に興味につながっていきますので、そんな工夫もおもしろいということから、帝国を推したいというふうに思います。

【小田嶋教育長】

子どもの視点に立って両社を比較していただきまして、それぞれにいいところがたくさんありますが、帝国書院ということでお話をいただきました。

私も両方の地図を見て、大変工夫されていて、昔の地図に比べると、見ているだけでも楽しいところがたくさんありまして、本当におもしろいなというふうに思ったところですが、皆さんから御指摘のあった、関東地方の地図での川崎の位置関係が、他県との関係が大変よくわかる。先ほど岡田委員からあった、二ヶ領用水が確実に示されているということと、あと多摩川水系のつながりも非常にわかりやすいということ、あと私は、先ほど情報量が多過ぎるという高橋委員の意見もあって、そのとおりでということもあるんですが、帝国書院のほうは広く見渡す地図ということで、あえて情報量を少なくして全体の図をつかむ地図が掲載されていて、それが大変有効だということもあって、私も帝国書院がいいなと思いました。

それでは、地図につきましては、帝国書院を採択するというところでよろしいでしょうか。

【各委員】

<可決>

【小田嶋教育長】

では、そのように決定いたします。

⑤ 算数

【小田嶋教育長】

続きまして、算数の審査に行きます。

では、算数につきまして、御意見をお願いいたします。

高橋委員。

【高橋委員】

私は、東京書籍と教育出版がよいと思いました。

まず、東京書籍は、1年生の最初の2単元がA4判の別冊になっており、直接書き込むスペースが多く確保されています。特に足し算の繰り上がりにつながる、さくらんぼ算というんですかね、さくらんぼの形をした幾つと幾つというふうに分ける練習がたくさん載っていて、1年生の導入としてとても使いやすいものだなというふうに思いました。

教科書は、全体を通して吹き出しなどで非常にヒントが出されていて、とても丁寧でわかりやすいと思う反面、答えが簡単に想起してしまえたり、授業のまとめの感想のところで、すぐに下に感想の例が載っていたりして、少し子どもたちの考えが誘導的になってしまうのではないかなというふうに感じる場所がありました。

教育出版は、各単元の導入が見開き2ページで構成されていて、そこに単元の名前が書いておらず、これから何を学ぶのかという子どものわくわくする気持ちをとても大事にしている構成だなというふうに感じました。それから、吹き出しでのヒントなども適切な量だなというふうに感じました。各単元のまとめにある4コマ漫画も子どもが楽しく単元を振り返ることができるのではないかと思います。

そして、上巻の巻頭に「算数で使いたい考え方」、それから各教科書の巻末に「算数のミカタ」というのが掲載されていて、川崎市の算数が大事にしている数学的な見方・考え方を非常に意識したつくりになっているというふうに感じました。

さらに、巻末の既習事項のまとめコーナーが、とても丁寧で充実しており、教科書の途中で復習問題もありますし、巻末の補充問題にも難易度が示されていて、子どもたちの状況に応じて選ぶことができるなど、既習事項の振り返りがしやすいと思いました。

さらに、算数で使う道具についても、コンパスや三角定規の使い方が6年生まで掲載されていて、子どもが自分で困ったなというときに確認することができますし、先生が参考に使うのにも巻末を開いてくださいと言えばいいので、探したりしないので、すごく便利だなというふうに思いました。

既習事項の振り返りやすさについては、かわさき教育プランにもある一人ひとりに合った教育ニーズに対応するという観点からもとても重要だと思っています。

以上から、教育出版がよいと思いました。

【小田嶋教育長】

いろいろな観点から、東京書籍、教育出版を比較していただきながら、教育出版のほうがよりいいということでお話をいただきました。

ほかにいかがですか。

ちょっと私も指導主事にもちょっと聞いてみたいと思っていることがありまして、プログラミング教育が今回改訂で新しく入ってくるというところで、どの教科書も正八角形をつくるプログラムをつくらうということで、大きな差異はないなというふうに感じたところだったんですが、学校図書が各学年1年生からプログラムのプとか、プログラムのロと、各学年で扱ってきているということで、ちょっとそここのところに気がつきまして、ただ、もしかしたらほかの社でも同じような内容を扱っている部分もあるので、その辺の扱いがどうなっているのかなということで、ちょっと指導主事のほうから説明をお願いしたいと思いますが。

【松本カリキュラムセンター指導主事】

今、お話がございましたプログラム教育ということですが、今お話がありました学図さんのほうで全学年というふうなお話がありました。ただ、大日本さんも同じようにありますが、例えばプログラム教育というふうにならなくても、例えば大日本図書さんの教科書の後ろのほうなんです、「 $72 \div 3$ 」という問題がありまして、それを大日本さんはアルゴリズムということでプログラム教育、プログラムの思考ということでお話があります。ただ、この「 $72 \div 3$ 」の筆算なんです、こちら教出さんも、啓林館さんも、学図さんも、日文さんも、東書さんも同じ「 $72 \div 3$ 」の筆算を使いまして、「 $72 \div 3$ 」、最初の7を3でわって2を立てる、立てて次は引く、引いて次はおろすというふうに、アルゴリズム的思考、プログラムの思考というふうなことでうたっております。あくまでも今は例ですが、ほかにも同じような場面で学図さんだけではなく、大日本さんだけではなく、他社も同じようにプログラムの思考ということで大変工夫をされておりますので、大きな差異はないかなというふうに考えております。

以上です。

【小田嶋教育長】

ありがとうございます。プログラミングに関しては、大きな差異はあまりないということです。

ほかの委員の方。

中村委員どうぞ。

【中村委員】

今プログラミング教育の御説明がありましたけれども、私も新学習指導要領で特に変わった点について調べました。それで「統計」がもう一つ重要な点としてあるのですけれども、そこを確認したところ、各社とてもわかりやすく説明されていて、工夫されていると思いますが、素材としましては、教育出版の「読書チャンピオン」が一番現実的で子どもの生活に合っているのではないかという気がいたしました。「統計」について学ぶだけでなく、教科書の言葉で言うとPPDA Cということですが、具体的に使って考えてみたいと思ってもらえるのではないかと思

いました。

また、私は教育学部で教員養成をしているものですから、教育委員としてのみならず、本業でも学校を訪れることが多いのですけれども、子どもたちが学んでいる様子を見ますと、左利きのお子さんがコンパスとか定規とか、そういうものをちょっと使いづらそうにしている様子を見ることが時々あるんですね。それが気になっていたものですから、今度の新しい教科書ではどうなっているのか、利き手への配慮という点を調べましたところ、教育出版が一番よいと思いました。

あと、そういう多様性という点については、1点だけ教育出版で気になったものとしては、ちょっと見過ごしてしまいそうなことなんですけれども、1年生の最後に載っております、「算数の問題をつくろう」という絵があるんですけれども、そこに描かれているランドセルの色が赤と黒だけなんです。今はいろいろな色のランドセルがありまして、多様性が尊重されている時代ですから、三、四色あってもよかったのかなという気がいたしました。でも1年生の問題ですから、赤と黒という2色のほうが問題をつくるためにはわかりやすいのではないかと思いますので、そういうことが配慮されているのかもしれないかもしれません。でもこの点については、アンケートにも書かれていたんですけれども、こういう細かい点についても気づいてくださる川崎の市民の方の視点というものは、本当に大切だなと思ひまして、感謝したいと思ひます。

【小田嶋教育長】

ありがとうございます。新しく入ってきた「統計」の扱いで、どこも工夫してわかりやすくなっていますが、特に教育出版が、「読書チャンピオン」が子どもたちの身近に感じられるのではないかということでした。また、ランドセルの指摘もございました。

岡田委員、どうぞ。

【岡田教育長職務代理者】

「川崎の子どもが学習を進めていく上での視点」、これが算数は四つ示されております。その視点に立って読ませていただいて、私は学図と教出がいいなというふうに思いました。

そしてさらに、学図と教出を見させていただいて、主体的・対話的で深い学びにかかわるところで私が思うポイントというのは、問いなんです。教師が発する問いでもあるけれども、子どもたちがどんな問いを発するかというのは、とても大事な視点だというふうに思っております。

その意味で、教出では、問いの連続でつくる数学活動というような形で、「はてな?」、「なるほど!」、「だったら!？」というような吹き出しで、この問いに関して示されている。これはとてもよくて、この算数の学びが他の教科での主体的・対話的で深い学びにつながっていく可能性があるなというふうに思いました。

それから、かわさき教育プランに関してですが、ここでも教出の小学校6年生の算数の「広がる算数」というところがありまして、ここで「身の回りには比がいっぱい」と書いてありまして、そこに二ヶ領用水、久地円筒分水というので、川崎のものが写真で示されてありまして、具体的にどうなのかというのに、例としてこれが挙げられているということもありまして、最初に申し上げた学図と教出、どちらもいいなと思ったんですが、私は教出を採択教科書としたいと思ひます。

【小田嶋教育長】

では岩切委員、お願いします。

【岩切委員】

全体的な構成に関してなんですけれども、各社とも、まず問題をつかむ、2番目に自分で考える、3番目に学び合う、4番目に振り返るという流れが主流の中、3番目の学び合う、4番目、振り返るの間に、大日本さんが「使ってみよう」というのがあったり、それから啓林館さんは「確かめよう」というのがあるのが非常に特徴的だなというふうに思いました。

学んだことを数学的な活動につなげるために、各社とも各巻末のところに、生かすということ念頭に入れた箇所がありまして、そういった活動を設定しているということでは、どの教科書も非常によく編さんされているなというふうに思いました。

それで、なかなか甲乙つけがたいということもございましたので、新しい題材になっている「データの活用」の観点で調べさせていただきました。「データの活用」の観点で見たところ、各社とも先ほどのP D A Cの過程で提示されていますが、全社とも、まず5年生以上は必ず事例があるんですが、教育出版が4年生から、それから日文さんが3年生からありまして、知識、技能の定着という観点から見ますと、繰り返し勉強ができるという意味で教出、そして日文の2点がいいのではないかなというふうに思いました。

【小田嶋教育長】

ありがとうございます。

ほかにいかがでしょうか。

小原委員。

【小原委員】

ほかの委員の方がかなりいろんなお話をされているので、私は簡潔にちょっと言いたいと思います。学習の進め方がはっきりしていることや、学習の仕上げに、振り返り活用、見方、考え方などを再確認がある東京書籍か、子どもの問いから問題が始まる学習の流れがよいということと、つまずきのポイントを意識できるようにしている教育出版のどちらかというふうに考えております。

以上です。

【小田嶋教育長】

ありがとうございます。

私も皆さんがおっしゃったところは、ほぼ見てきましたが、特に私が見てきましたのは、算数の楽しさや数学的活動の充実、生活や学習への活用という観点で、各社大変工夫しておりまして、非常に興味深く読むことができました。

その中で、啓林館の「ひろがる算数」というところで、5人の人物を挙げて、5人の人物の紹介ですとか、また、なぜ学ぶのかというところなどは、非常に子どもにとっては興味深く、親しみながら算数への興味関心が高まる、そういう工夫が各社いろいろされている中で、教育出

版は「開け算数ワールド」というところと、先ほど岡田委員からもありました、「広がる算数」のところの円筒分水を紹介しながら、比のことを出しているというふうなところ、そういったところと、あと6年生から5年生に移行されました「速さ」の単元なのですが、これを「単位量あたりの大きさ」ということで扱っているのか、単独で扱っているのかという中で、「速さ」を単位量あたりの変化というふうに捉えている、そのほうが私もわかりやすいのではないかなと思ひまして、それを扱っているのは、教出、東書が単位量の中、あと学図ですね。学図、日文が扱ってまして、大日本と啓林館は、「速さ」は別に単独の単元として扱っている。その辺も含めて総合的に考えて、私も教育出版がいいかなというふうに思っております。

総合しまして、算数につきましては、教育出版を採択するというところでよろしいでしょうか。

【各委員】

<可決>

【小田嶋教育長】

では、そのように決定いたします。

⑥ 理科

【小田嶋教育長】

では続いて、理科の審査に入っていきます。

では理科につきまして、岩切委員、お願いします。

【岩切委員】

理科は出版社6社ございまして、かなりの量がございました。単元ごとの構成に関する論理性につきましては、6社ともよく整理されておりまして、そして各社の違いというのは、各学年の単元の構成とか、配列に意図があらわれているのかなというふうに思いました。プログラミングなども6年生で導入されているという点では、各社とも同じようになっているかなというふうに思いました。

どれがよいとか、悪いというわけではなく、それぞれの特徴と意図を理解したつもりなんですけれども、子どもたちが、これまでに学んできた知識、そういったことをフル回転させて問題解決に向かうようなことを前提として教科書を読ませていただきました。

5年生の「ふりこ」の単元で比較を行いましたけれども、子どもに考えさせるという構成をとっているなというふう感じられたのが、東書、大日本、啓林館でした。それから、加えて6年生の今度「てこ」の単元で比較をしてみました。論理的思考に基づいて結論を得るところは、ほぼ各社変わらなかったんですけど、さらにその次につなげていくという構成になっていたのが、東書、教出、啓林館でした。

結果として、東書と啓林館に絞り込んで検討していきましたが、私はもともと理科を専攻していたということもありまして、啓林館のすっきりとした記載というのが非常にわかりやすいなど

いうふうに思いました。

東書の場合には、啓林館に比べて詳細な記載が非常に多くて、編集の方法がかなり異なっているなというふうに感じました。

大きく異なっているところなんですけれども、構成の違いというのが5年生の教科書に見ることができました。「流れる水の働きと土地の変化」については、自然災害についても触れることという内容の取り扱いとなっておりまして、「天気の変化」については、台風の進路による天気の変化や台風と降雨の関係及びそれに伴う自然災害についても触れることの内容の取扱いとなっています。そういったものがどのように配置されているかというのを比較してみました。

構成としまして、まず「雲と天気の変化」、2番目に「台風」、そして最後に、「流れる水のはたらき」となっている出版社が多い中、「台風」を先に持ってこられていたのが、学校図書と啓林館でした。啓林館さんのほうの意図も調べさせていただいたんですけれども、夏休みや校外学習の機会に防災への意識を働かせられるように前に持ってきたというような記述がございました。

ただ、これは大局的な一般法則を把握してから例外的なものを理解するという、こういうステップを考えますと、子どもにとっては、その例外的な動きをする「台風」を学んでから、一般的な「天気の変化」について学ぶというその順番というのは、ちょっと混乱を招くリスクがあるかなというふうに感じられました。

そういう意味からも、子どもの理解の観点、それから、必ずしも理科を専門とされていない教師が多いという川崎市の実情にあわせまして、私は啓林館か東書と思っていました。東書がいいのかなというふうに今は思っております。

【小田嶋教育長】

ありがとうございます。具体的な単元で比較していただきながら、特に「天気の変化」と「台風」の位置づけを比較しながら、最終的には、東書のほうがよりいいのかなというふうなお話をいただきました。

理科につきましては、ほかにいかがでしょうか。

中村委員、どうぞ。

【中村委員】

今、岩切委員からお話がありましたけれども、私も理科についてはとても悩みました。それで、理科は特に学習指導要領での要点と照らし合わせて教科書を拝見いたしました。約10年に一度の学習指導要領の改訂があるということには、それなりの意味がありまして、改訂に伴い変化が大きいと、特に教科書を工夫されてきたと思ったのは、東書、学校図書、教育出版でした。

今回の改訂の要点としては、目的の示し方、「理科の見方・考え方」というのがあります。

「理科の見方・考え方」という点では、単元の導入の工夫、問題解決の力を育むための工夫、学ぶ意味や有用性を感じさせるための工夫などが考えられます。

岩切委員と同じように、「流れる水のはたらき」とか、「天気」などの単元を確認したところ、導入では、はじめにめあてを書くか、写真などから考えさせるかの違いがありました。子どもに考えさせるのが私はいいと思っています。

また、「学ぶ前の私」と「学んだあとの私」ということなど、東書には、児童が主体的に考えら

れるような工夫が随所に見られます。児童の主体性を大事にしているという点は、表紙からもわかります。東書の教科書の表紙では、「見つけたい」「たしかめたい」「くわしく調べたい」「もっと深めたい」など児童目線で書かれていて、児童主体の学習を展開していかなければいけないという大事さがとても伝わってくるので、いろいろ考えた結果、どの教科書もとても工夫はされているんですけども、東書がいいのではないかと思いました。

【小田嶋教育長】

ありがとうございます。

ほかの委員の方はいかがでしょうか。

今「流れる水の働きと土地の変化」のお話がありましたけれど、5年生のその単元につなげるために、今度の指導要領で、4年生に「雨水の行方と地面の様子」というのが新たに加わったということで、ちょっと私もその点のところのつながりと、新しく追加された内容の扱いをちょっと見てみましたが、各社それが入っているんですが、やっぱりちょっとボリューム感に違いがあるなというのを感じまして、ページ数も大分違っているというところで、啓林館が6ページ、あと信州教育出版が8ページ、大日本が10ページ、あと東京書籍、教育出版が12ページと、あとその後に続く単元との関係もあるんですが、ちょっとそのあたりのことを指導主事のほうで説明していただいてよろしいですか。

【永田カリキュラムセンター指導主事】

今回、新学習指導要領で4年生に追加された「雨水の行方と地面の様子」については、今の5年生のほうの「流れる水の働きと土地の変化」の学習を今まで続けていたんですけども、水が高いところから低いところに流れていくということと、あと水のしみ込みやすさというのが地面の粒によって違うということの、この知識がないまま、5年生のここの学習に入る難しさがあるということで新設された単元になります。ですので、この4年生では、多くの社が、校庭の雨水の流れる様子等を見ながら、そこで子どもたちが水が流れているところとか、水がたまっているところとか、そういうところに着目をして、その原因を探っていくというような学習が設定されました。

【小田嶋教育長】

ありがとうございます。今4年生の部分で、東京書籍がその部分、4年生のその単元は東京書籍が充実しているのではないかなと感じたところです。

あとちょっと私のほうから、私も自分で教員として授業をやりながら、補助発問というのを非常に重要視してしまして、大きな発問のほかに、子どもたちの反応によって補助発問をどういふふう工夫していくかというのが大きいんですが、東書の教科書に「理科のミカタ」というコーナーがあって、それが補助発問を中心に、非常に子どもたちにとっては、もう一歩深く考えてみる、違う角度から考えてみたりするときに有効ではないかなということで、その部分が非常にいいなというふうに思ったところがあります。

あと単純に、この幾つかの教科書の中で東書の教科書が一番大きくて、アンケートの中にも教科書の大きさとか、重さの記述が随分ございましたけれど、3年生から理科ということで、

体も少し成長しているということで、東書の教科書は大きくて、レイアウトの写真や説明なども大変見やすくなっているという点で、私も東書が非常に使いやすいのではないかなと思ったところですが、ほかの方はいかがでしょう。

小原委員どうぞ。

【小原委員】

私は、ちょっと違う部分のところで見ていたんですけども、どの教科書も導入部分、単元のめあてや「理科の見方・考え方」のヒント、問題解決の流れ、身近な生活につなげるなどを意識している構成になっていて大変すばらしいんですけども、実験結果の考察とまとめ、もしくは結論という部分で、少し川崎の子どもたちが扱う教科書としては、ちょっと判断に悩む部分があります。ただ、これは構成上仕方がないというふうなこともありますので、これを考慮しないで決めることになるんですが、問題解決の過程が明快な東京書籍と、導入の工夫がされているということで教育出版のどちらかというふうに考えています。

以上です。

【小田嶋教育長】

ありがとうございます。東京書籍か、教育出版のどちらかということですけども、その前におっしゃったのは、教科書の中でいろいろ考えさせているけれど、結論が見えてしまうということですね。

【小原委員】

多くのところで結果で、表なり何なりでも構わないんですけども、まとめたり、実験のわかった結果とか、答えとか出てくるんですけど、その次のそこを踏まえた上で考察をするというところがあるんですけども、その考察をするすぐ下に、まとめとして、何というんでしょう、答えみたいな状況で出てきてしまうという、これは構成上仕方がない部分ではあるんですけど、少し何か工夫がされて、例えば次のページに答えがあったりするところもあるんですけど、全部が全部そういう形にはなっていないというところで非常に悩んでしまいます。答えが子どもたちからすれば見えてしまっている状態で考えなさいというのは、かなり難しいかなというふうに私は思っています。

【小田嶋教育長】

ありがとうございます。問題解決的学習の展開がどの教科でもやられたときに、私も一番最初に申しあげました、展開が見えてしまったりとか、ヒントや答えが親切過ぎてしまったりという、使う側の教員の側が教科書を本当にうまく使っていく必要があるのかなというふうに思いますが、多分ほかの教科でも同じような要素があるのかなとは思いますが。

岡田委員どうぞ。

【岡田教育長職務代理者】

同じことを繰り返しますが、「川崎の子どもが学習を進めていく上での視点」が理科では三つ示

されております。これを踏まえて、出そろっている会社のものを見させていただいて、私は啓林館さんと東書、どちらかかなというふうに思っているところです。

例えば東書さんが、最後のところに学習のまとめというのが書かれていて、そして日常生活と社会へのかかわりのある事例として「理科のひろば」、これ平仮名のひろばです。というのが示されています。同じく啓林館では「理科の広場」、こちらは漢字なんですけれども、というふうに示されていて、発展的な内容で「つなげよう」というのが設定されております。

それから、同じく啓林館さんは、単元の扉のところに、「はじめに考えよう」というのが出てきて、その単元の末のところで、「もう一度考えてみよう」というような設定になっています。

東書さんのほうも学びによる変容が自覚できるようにということで、単元の扉に「学ぶ前の私」というのが設定されていて、単元の末には、「学んだあとの私」というふうにして、同一の問題を設定しているということでもあります。

そういったところから、なるほどなというふうには思ったんですが、東書さんが導入のところで「レッツスタート」といって、きっかけとなる写真と漫画が入っているんですね。だから簡単なというか、簡易な体験とかがそこに示されていて、疑問を出発点に主体的な学習が進められるようにしている、先ほど申し上げた問いというところからいくと、東書がいいなというふうに、今思っているところです。

【小田嶋教育長】

ありがとうございます。

理科につきまして、東書、啓林館、教出と挙がっている中で、啓林館のよさというのも、岩切委員からも語っていただきました。

全体を通して共通する部分としては、東書を推す声が大きいのかなというふうに感じますので、理科につきましては、東京書籍ということで決定してよろしいでしょうか。

【各委員】

<可決>

【小田嶋教育長】

では、そのように決定いたします。

ここで1時間程度の休憩をとりたいと思いますが、いかがでしょうか。

【各委員】

<了承>

【小田嶋教育長】

では、これから1時間休憩をとります。

再開は、12時45分といたします。よろしく申し上げます。

(11時46分 休憩)

(12時45分 再開)

【小田嶋教育長】

それでは、ただいまから教育委員会を再開いたします。

⑦ 生活

【小田嶋教育長】

休憩前に引き続き、生活科の審査をしてまいりたいと思います。

それでは、各委員様から御意見をお願いいたします。

岩切委員。

【岩切委員】

生活科についてお話しさせていただきます。新指導要領で生活科というものがスタートカリキュラムの核になっているということで、幼児期に育む姿から、3・4年生の中学年に向けての移行をスムーズに行えるような工夫や構成がとられているということが非常に重要になってくるかなと思います。

今回、8社ございまして、これらを調べてまいりました。1・2年生の児童がこれまでの幼稚園とか保育園での遊びで学んだことを、今度学校に上がって学習の形に高めていく過程ですし、それから、他教科との関連を生かしていく内容や構成というものがあるかどうか、こういった点が非常に重要になるというふうに思いました。

特に、まだ入学したての子どもたちというのは、まだまだ世界が非常に狭く限られたものであるために、なじみのある導入、そういったものが理解の助けになると思って拝見させていただきました。

幼稚園、保育園を卒園したばかりの子どもたちが、これまでの遊びの時間からどのように学習に移行するかというところを、各社とも非常に工夫を凝らしておりました。

東京書籍さんは、「どきどき わくわく 1ねんせい」という項目の中で、ページの一部下を切り取った形でブックレット風に仕立て、特別ページにしております。

同様に、大日本図書さんも、こちらのほうは上のほうをカットする形でのブックレット風にしておりまして、「しょうがっこう せいかつ はじまるよ」というものを掲載しております。

それから、学校図書さんですが、こちら「がっこうだいすき」という形で、やはり短く切ったブックレット型で紹介しています。

そして、教育出版さんなんですけれども、こちらのほうは、特に切り込みとかそういったものはございませんでした。

それから、信州教育出版さん、こちらだけ縦書きの教科書になっているんですけれども、縦を少し切ることで、やはりその部分だけをブックレット風にしております。

そして、光村さんは、写真をふんだんに使うという形で、ここも特にそういった切り込みはご

ざいませぬ。

それから、啓林館さんは、下を切るといふ形と丸みを帯びさせることで、ここだけ特別扱いにしています。

そして、日本文教出版さんも、少し端を切るような形でブックレット風に仕立てています。

そういった意味で、2社以外は、少し別仕立てといふような形で、特出したページを設けているといふふうに見えました。

導入で非常によいなと思つたのは、園児のころの自分と比較することで移行しやすいような導入になっていると思つたのが、啓林館さんと東京書籍さんでした。啓林館さんと東京書籍さんの大きい違いは何かといふと、これはちょっと大きさが違っているんですが、啓林館さんはこのサイズですけれども、東京書籍さんのほうは少し大判のA4サイズといふことで、ちょっとこら辺が気になるところで、啓林館さんがいいかなといふふうに私は思いました。

そんなところですよ。

【小田嶋教育長】

ありがとうございます。スタートカリキュラムの工夫の比較をしていただく中で、啓林館と東京書籍を推薦していただきました。

ほかの委員さん、いかがでしょうか。

中村委員。

【中村委員】

私も東京書籍と啓林館でとても悩みました。東京書籍のほうは、もうほとんど同じなんですけど、幼稚園からのつながりが吹き出しで示された言葉などでよく考えられるようになっていきます。あと種から植物がいかに育っていくかといふもので、ページをめくっていくごとに成長していく過程がきれいに見えるところが、とても工夫されていておもしろいと思いました。一目瞭然になっています。あと写真が豊富ですし、3年生へのつながりといふことで、外国語活動や総合的な学習の時間まで示されていることなどがいいと思いました。

しかし、岩切委員もおっしゃっていたように、写真が大きくてわかりやすい分、教科書のサイズが大き過ぎて、小学校1年生の子が持てるのかといふのがちょっと不安になりました。

啓林館のほうは、同じようなつくり方をしています。特にいいと思つたところが、人権感覚です。あと写真が豊富で、安全に関する項目が都会的です。幼稚園や保育園からのつながりもすごくいいと思いました。

同じようなつくり方をしているんですけれども、東京書籍よりも啓林館のほうは小さいサイズなので、持ちやすさという点では啓林館のほうがいいと思いました。児童の言葉に、どちらにも吹き出しがたくさん出ているんですけれども、東京書籍のほうは主体性があるような気がいたしました。東京書籍のほうがいいかなと思いつつ、ちょっと悩んでいるところです。

【小田嶋教育長】

ありがとうございます。東京書籍と啓林館を挙げていただいて悩んでいる、どちらのほうかといふところでは。

ほかにはいかがですか。

小原委員。

【小原委員】

私が考えているのは、東京書籍さんのところで、生活科で育成すべき資質・能力が児童の吹き出しからわかる工夫をしていることや、児童の思いや願いから始まり、友達とかかわりながら課題を解決するという構成になっていること、あとスタートカリキュラムがある、幼児教育で行ったことを想起している子どもの吹き出しの掲載や、中学年との接続を意識した記述をしているというところがよいところだというふうに感じております。

もう一つ、教出ですけれども、2年生の、「まちが大すきたんけんたい」と「えがおのひみつたんけんたい」というところでは、麻生区を取り上げた画像が多数ありまして、これは社会科の中の社会的事象を身近に感じられる事例地という感じで、3年の社会科で学ぶことにつながりというふうに感じています。

ですので、私のほうは東書か、教出のどちらかをお願いします。

【小田嶋教育長】

ありがとうございます。東書か教出、教出のほうには麻生区の事例が載っているというところで推薦がありました。

岡田委員、お願いします。

【岡田教育長職務代理者】

生活に関して、「川崎の子どもが学習を進めていく上での視点」、これは三つ指摘されております。それを踏まえて、各教科書を見まして、先ほど小原委員のおっしゃったように、スタートカリキュラムということもあって、さらに、まち探検で、これは教出なんですけれども、下巻の30ページのところですね。「たんけんに出かけよう」というところで、神奈川県川崎市のお友達のまち探検というふうなことが記されていて、麻生区のことを取り上げられているというのがありました。

それから、さらにかわさき教育プランのことを考えたときに、このテキストを使って、さらに読書活動につなげていくということが示されています。ただし、先ほど各委員からの指摘がありましたように、東京書籍さんが大きい版で、教育出版さんがこのサイズになります。一長一短があって、大きいほうが見やすくいいなというのもありますし、コンパクトにまとめられて、それもいいなというのがありますけれども、どうかなというふうに正直迷っているところであります。

それから、東書さんですけれども、先ほどありましたように、国語科、算数とか、ほかの教科への関連付けというか、そういったところも示されているので、私もどちらがいいかなというふうに思っているところであります。

【小田嶋教育長】

ありがとうございます。先ほどから大きさのことが、東書を薦める声も大きいんですが、ちょ

っと大きさが大きいのではないかと。

高橋委員、お子さんも3年生ですかね、今。下のお子さん。経験上でちょっとまたお話をいただけると。

【高橋委員】

私は、東京書籍か、教育出版がいいのかなと思ってまして、観点としては、とにかく見やすい紙面であるというところにポイントを置いてみました。

教育出版のほうは、大きさは小さいですけども、吹き出しが余りなくて文字が少ないので、小さいけれど、文字が少な目なので非常に見やすい紙面になっているなというふうに思いました。

やっぱり東京書籍さんは、紙面が大きいので、吹き出しなんかで字は多いんですが、紙面が大きいので写真も大きいですし、吹き出しがあっても、そこまで字が多いなという印象が薄まるのかなというふうに思いました。

先ほどから大きさに関する御懸念が出ていると思うんですけども、確かに大きいし、ちょっと重いなという印象はあるんですけども、今は教科書を持ち帰ることは少なくなっているということと、生活科はとても活動が多い授業で、私もボランティアで付き添いをしたりですとか、PTAなんかで学校に行ったときに、子どもが活動している様子なんかよく見させていただいているんですけども、恐らくどの学校も共通だと思うんですけども、教科書は持っていることは全くなくて、字を書く用の画板みたいなそういうものと、そこにプリントなり、ワークシートみたいなものがある、鉛筆を1本、消しゴム1個ぐらいな非常に身軽な形で学校探検したりですとか、まち探検をしたりしているので、これを持ち運ぶということは、余り想定はしなくていいのかなというふうに思っています。

自分の子どもとか、周りの子どもなんかにもちらっと聞いていると、やっぱり紙面が大きかったり字が大きくて読みやすいほうがいいなというようなことを子どもが思っているのかなというのは感じているところです。

なので、教育出版さんと東京書籍さんで迷っているというところです。

【小田嶋教育長】

ありがとうございます。御自身の経験から、貴重な意見ありがとうございます。

東書、啓林館、教出と出ていて、私もそれぞれよさを感じているところですが、私は光村の作りがすごくシンプルで、ほかのものに比べると写真が少ないんですよね。絵というか、イラストというか。逆に新鮮さみたいなものを感じる中で、光村の特徴として、シールで自分のことを振り返るということで、シールを活用したページ、それをまた1年の終わりに「ジャンプ」というページに貼りかえていくという中で、自分の成長とか変化の様子を見てとれるという、非常にそこもおもしろい工夫だなということで、光村もいいなと思っております。

ただ、皆さんの御指摘の、それぞれの教科書の特徴もある中で、私も東書は皆さんから御指摘があったようなところ、大きさの点では懸念もありましたが、今、高橋委員からもそういったお話もあったということと、あと別冊で、「ほんとうのおおきさ ポケットずかん」みたいなやつですかね、あるんですね。それもとても観察等していく中で有効に使えるだろうなというのと、東書で私が一番いいと思ったのは、まち探検等をして子どもたちの生活の範囲とか視点が広がっ

ていくときに、まちの図、どの教科書にもまちのイラストみたいなものが出ているんですが、カラフルに。あえて東書は、モノクロの中に一部色をつけていて、それが子どもたちの生活が広がっていく中で、だんだん色のぐあい広がっていくと、その工夫というのが非常にいいなというふうに思っていました。

ですから、私も皆さんと大体同じようなところではあるんですが、一応今、皆さんから出た意見を共通している部分でいいますと、やはり東書という部分が重なっているかなというふうに思いますので。

岩切委員、何かございますか。

【岩切委員】

今、教育長がおっしゃられた光村なんですけど、実は私、この中ではちょっと異色だなと思った印象がありまして、光村の場合には、この1年生の最初から、横書きのところの読点がカンマで書かれているんですね。ほかの教科書のほうは、なるべくそういった句読点を使わずに、すき間というか空間をあけることで分節を見せるような工夫をされているんですが、まだ小学校できちんと句読点を習う前に、カンマを使ってしまうと、子どもが混乱するのではないかなというのは、ちょっと思いました。

光村さんのホームページのほうでも調べさせていただいたんですけども、光村さんの場合には、横書きの場合にはカンマで統一しているということでしたので、ちょっとそこが私は気になる点でした。

【小田嶋教育長】

ありがとうございます。

高橋委員。

【高橋委員】

私、先ほど教育出版で見やすさで字が少ないというところを言ったと思うんですけど、光村さんも字が割と少なく、見やすいなというところを魅力に感じたんですけど、本文の文章が基本的に手書きふうの字体になっていて、ほかの教科書で吹き出し部分とかキャラクターがしゃべっているとかが、こういう手書きふうになっているところはあったんですけど、これは本文自体が、本文というか、この手書きふうの字で統一されている感じがして、子どもたちにとって親しみやすいという考えもあるんですけども、私は、まだ平仮名を勉強したり、ちゃんとした字体とかを習っている途中の子どもたちには、やっぱり正しい、わかりやすい形の字を読んでもらったほうがいいのか、混乱が少ないのかなということを思いまして、光村さんのほうは候補から外したというところがあります。

【小田嶋教育長】

ありがとうございます。お二人から、光村の課題として捉えられるようなところも御指摘いただきました。

全体を通しまして、共通している部分は東書が重なっているのかなというふうに思いますので、

生活科の採択としては、東京書籍を採択していきたいと思いますが、いかがでしょうか。よろしいですか。

【各委員】

<可決>

【小田嶋教育長】

では、生活科につきましては、東京書籍で決定したいと思います。

⑧ 音楽

【小田嶋教育長】

続きまして、音楽の審査に入っていきます。

それでは、各委員から御意見をお願いいたします。

高橋委員。

【高橋委員】

私は、川崎市の状況として、専科の先生がいない学校があるということと、それから経験10年以下の若い先生が多いということと、また全ての先生が楽譜をきちんと読めたり、楽器が上手に演奏できるわけではないというような状況も考慮しながら、2社の教科書を拝見いたしました。

音楽はこの二つの会社さんが出されているわけですが、全く違ったタイプの教科書で、どちらにもそれぞれ大変魅力がありまして、正直とても選ぶのに悩みました。

まず、教育出版さんなんですが、鑑賞の曲数がとても多くて、耳なじみのある曲や中心となる共通事項がわかりやすい曲など、選曲が素晴らしいというふうに思いました。また、「おんがくにあわせて こねこになって おどろう」ですとか、「曲に合わせて歩いてみよう」といった、身体をダイナミックに使って感じるための記述がとても多くて、子どもたちの音楽に対する感性を伸び伸びと高めることができる点が非常に魅力に感じました。

ただ、全体構成として、主要部分とオプション部分に分かれていて、オプション部分や、ほかのところから、子どもたちに学ばせたいことに対して、適切な曲や分野を選んで、教科書に載っている主要の部分とうまく組み合わせながら一つの題材を構成するというのは、教育出版さんの教科書を使った実績がなくて、教材研究の蓄積がない川崎の状況で、専科ではない先生には少し難しいのかなというふうに考えました。

また、音楽づくりについても、内容は非常におもしろいんですけども、高学年になると急に難しくなる印象を受けました。また、内容が難しい上に、ワークシート、記入欄とかもなくて、先生のほうでワークシートなどの準備が必要になるので、活動を適切にやらせるための先生の負担が大きいように感じました。

一方、教育芸術社さんは、一つの題材で、歌唱、器楽、演奏、音楽づくり、鑑賞のような、さまざまな活動によって、中心となる共通事項にアプローチすることができ、子どもたちが前の

時間とかに学んだことを生かしながら、ステップを踏みつつ、資質能力を身につけることができる構成になっているのかなというふうに感じました。

また、音楽づくりについては、扱う共通事項が学年にあわせて適切に選択されていて、また説明が詳しく、教科書に記入欄も確保されていることが多いので、子どもにも活動しやすく、先生も指導しやすいのではないかとこのように思いました。

以上から、私は教育芸術社がいいと思います。

【小田嶋教育長】

ありがとうございます。

川崎の教員の実態ですとか、またあと、共通事項とオプション部分との関係、扱い方というところから、これから技能教科2社で比較するということが続きますが、詳しく比較していただいて、教育芸術社、教芸のほうを薦めるということでした。

ほかに御意見をお願いします。

岩切委員。

【岩切委員】

2社ということで、比較検討させていただきました。まず最初の導入の部分で、1、2年生が音楽というものに触れるときに、どんな工夫をされているかを拝見したところ、教出さんの場合には、1、2学年のみ教科書の大きさを小さくされているということで、小さな子ども向けに扱いやすさを重視したつくりになっているなというふうに思いました。

それから、教芸さんの導入部分なんですが、幼稚園、保育園を卒園したての1年生の子どもたちにとって、知っている歌がもとにされているということで、想像力が膨らんで、導入がしやすいかなというふうに思いました。

他教科というところでどんな発展性があるのかなというのをちょっと拝見させていただきましたが、教育出版さんのほうは1年生で英語の歌、「Twinkle, Twinkle, Little Star」が入ってきたりとかしておりました。

一方、教芸さんのほうなんですが、4年生の教科書のところに「ごんぎつね」、これは国語の教科書にもありますが、「ごんぎつね」の歌と朗読を取り上げて、国語の表現の拡張としての音楽を意識したつくりとなっていて、このつながりがあるのが非常にいいなというふうに思いました。

それから、音楽の場合、和楽器とか日本の文化というところに触れるところも非常に大きいかと思うんですけども、4年生にお箏の記述があるんですけども、「ことのみりよく」と題して、教出さんのほう、見開きで掲載されておりました。

それから、教芸さんのほうは、「ことひいてみよう」というところから、何ページも割いて和音階を学ばせたり、旋律づくりに発展させたりということで、ちょっと発展性を感じました。

そんなことから、私も教芸のほうで、子どもたちが発展していく、それからほかの教科につながっていくというところで、いいのではないかとこのように思いました。

【小田嶋教育長】

小原委員はいかがでしょう。

【小原委員】

私のほうは、やはりほかの委員でもおっしゃっていたとおり、教出さんの、中心となる主要部分と補完する別の部分で構成されている教科書のつくりというのは、ちょっと気になっています。

一方の教芸さんというのは、学んだことを関連づけたり活用できたりするように、各教材が結びつけられているというところが、とてもよく感じております。

また、教芸さんのほうだと、音や言葉を使って、気づいたことやアイデアを友達と交換して、学びが深まるための子どものキャラクターによる吹き出しとか、音楽の特性にあった言語活動が充実するように、言葉に加えて友達と話をするように楽器を演奏したりとか、そういうアンサンブルする活動なども入っているというところがあります。

先ほどもお話ししたんですけれども、教芸のほうの題材に関連づけられた一連の流れというので、川崎の子どもたちが学習を進めていく上では、教芸のほうがよろしいかというふうに思っています。

以上です。

【小田嶋教育長】

お三方から今、教芸というふうにお聞きしていますが、中村委員、どうぞ。

【中村委員】

私も、とても悩んだんですけれども、教育出版のほう楽しい感じの曲が多く、自由度も高い気はしたんですね。ただし、この⑦の「構成・分量・装丁」というところの3行目ぐらいにも書いてあるんですけれども、選択可能なオプション部分が多いということは、教員の力量がとても問われてしまうところではあるんです。音楽は専科の先生がいるわけではないことを考えると、やはりあまり音楽が得意でない先生でも、ちゃんとめあてに則って教えていくということがすごく大事ですし、苦手な先生でも、今までの研究蓄積に基づいて、それを活用しながら教えていかなければいけないことなどを考えると、教育芸術社のほうが方向性は見えやすいし、あまり音楽が得意でない先生でも、めあてを外すことなく教えられるのかなというふうに思いました。

【小田嶋教育長】

岡田委員はいかがでしょう。

【岡田委員】

ちょっと視点を変えて見てみますと、今までの教科書が、ほとんどが「表記・表現」のところ、必ずユニバーサルデザインという、そういったものを使っている、またはそれに配慮しているということなんです、教出はそうなんです、教芸のほうは、特にそういうことではなく、子どもたちの色彩感覚とかに依拠しているのかなというふうに思って、そこが両者の中の違いの一つ出てきているなと思いました。

かわさき教育プランに関しては、両者とも、あまり差がないなというふうに思いました。

あと、もう一つ大きく違うなと思ったのが、主体的に学習に取り組んでいく態度という視点に

立ったときに、教出のほうは、歌唱の共通教材として、「にっぽんのうた みんなのうた」、「きせつのうた」ということで取り上げられていて、教芸のほうは「こころのうた」ということで取り上げられているんですが、これが題材と切り離れた楽曲を掲載しているのが教出で、題材の狙いに関連づけて掲載されているのが教芸であると。この点を見て、私は教芸がいいなというふうに思いました。

【小田嶋教育長】

皆さん、教芸ということで、私も学びやすさ、親しみやすさという点で教芸がいいなとは思っています。

あとまた、さっき言語活動のことも少し触れている発言がありました。私も、教芸のほうの、「詩と音楽の関わりを味わおう」という題材ですとか、あと、音楽が人と人をつなぐという部分があったりで、非常に音楽から広がっていくもの、あと音の役割としてブラインドサッカーを取り上げている点と、そういったことを、あと皆様方がおっしゃったようなところを総合的に考えて、教芸のほうは、川崎の子どもたち、先生にとってはいいのかなというふうに感じています。

ですので、音楽については教育芸術社を採択するというところで、決定したいと思いますが、よろしいでしょうか。

【各委員】

<可決>

【小田嶋教育長】

では、そのように決定いたします。

⑨ 図画工作

【小田嶋教育長】

続きまして、図画工作の審査に入っております。

では、図画工作科ですが、これも2社の比較ということになって、それぞれ特徴があると思いますが、研究された上での御意見を、では小原委員からお願いします。

【小原委員】

図工のところですけど、資料2の図画工作で三つの観点があるんですけど、それも踏まえ上で見てみました。

開隆堂に関してですけれども、各巻とも、ページでは発想のヒントになる活動風景とか、コメントの吹き出し、作品が載っていて、議論に関するヒントやつくり方なども、題材によっては提示していると。片づけは写真でわかりやすく表示されていて、道具の使い方は巻末の「造形の引き出し」に掲載してあります。安全に活動するための注意書き、あわせて学ぶための教材表示もあるということです。各巻に、紙や紙でできたものでやってみたり、つくってみたりする

「ひらめきコーナー」があって、各学年で、紙や紙でできた身近なものを主題材にして、ひらめきと技能を身につけるものとなっています。

一方、日文ですが、各巻ともページには、発想のヒントになる活動風景や気づきにつながる子どものコメントの吹き出し、作品には子どもの思いのコメントが載っていて、技能に関するヒントとかつくり方なども、題材によっては提示されており、片づけは文字表示、道具の使い方は巻末の「使ってみよう材料と用具」に掲載されていて、安全に活動するための注意書きや、あわせて学ぶための教材表示があります。

1、2の上巻から、3・4の下巻まで、身体全体を働かせながら活動する造形遊びがあったり、3・4の下巻から、5・6の下巻には、伝え合うものをつくる工作活動があったり、発達段階にあわせた構成になっています。

また、鑑賞のほうでは、開隆堂さんのほうは1年から芸術作品を感じとる学びの構成になっていて、「造形の引き出し」には材料の使い方とともに、表現方法が紹介されています。

日文さんのほうですけれども、鑑賞では全体的に、子どもたちが活動の中で素材、表現などを知るような形になっていて、「使ってみよう材料と用具」では、材料の使い方とともに表現方法が紹介されています。

開隆堂さんの全体的な感じとして、発想、構想の能力が働いている場面などの掲載もあり、完成までの過程がわかりやすくはっきりとしているところ、また、上手な作品や多彩な技能を使った表現方法の説明が多く掲載されているように感じています。

日文さんの全体的な感じですけれども、子どもの感受性やひらめきを大事にしたコメントや作品の掲載、実際の授業風景の写真を使って、自由な学びの空間をつくっているように感じています。また、作品も比較的年齢相応のものが多く、多様な表現で児童にとっての意味や価値を大切にしているように感じています。

ですので、川崎で子どもたちが、自分があらわしたイメージを持ち、発想、構想したことを創造的に工夫してあらわす学習を大切にするのであれば、日文さんというふうに考えています。

以上です。

【小田嶋教育長】

ありがとうございます。いろいろな観点から比較していただきまして、総合的に日文ということです。

ほかの委員はいかがでしょう。

岩切委員、どうぞ。

【岩切委員】

どちらも出版社も、構成上の比較をしますと、開隆堂さんのほうは「学習のめあて」、それから日文さんのほうは、黒板に見立てた「学習のめあて」が書かれていて、そういった意味では、単元の目的を非常に明確に示しているなというふうに思いました。

それから、どちらの教科書も材料や道具の使い方なども、非常に丁寧に説明されておりまして、また、「外国の友だちの絵」を掲載したりとか、国際色も豊かなつくりになっているかなというふうに思いました。

それから、表紙に関しても、両者とも子どもの絵を採用するなど、これから作り出す世界にワクワク感を感じるような、そんなつくりになっていて、非常にどちらもいいなというふうに思いました。

開隆堂さんなんですが、かなり多くの世界的にすぐれた絵画の掲載というものがあまして、子どものころから本物に触れる機会、そういったものを提供しているところは非常にすぐれているなというふうに思いました。

やはり、子どものときこそ本物を見るというのはとても大事なことだというふうに思っています。

実際に、教材の中身をもう少し具体的に比較していったんですけれども、1、2年生の下の方で、カッターで窓をつくる工作の中で、開隆堂さんのほうは「まどのある たてもの」という題材で、建物の窓をつくったり、それからドアをつくったりということをしております。

一方、この日文さんのほうなんですけれども、「まどから こんにちは」という単元になっておりまして、開いた窓から何が見えるかなという問いかけに、窓からのぞいた中の様子をつくるどころまで想像力を広げていたり、それから建物の窓として、中に円筒を入れて、そこに絵を描かせてみたり、それから紙を2枚張り合わせて、後ろの紙に絵をかいたり、あるいはもっと簡単に、ただ大きな穴をあけて、そこから顔をのぞかせたりということで、バリエーションに富んでいる点が、非常にいいなというふうに思いました。

こういった表現に関しては、何が正解ということはないので、そういう意味で、単純なものから複雑なものまでを受け入れるというところはいいかなと思います。

それから、もう一つ具体的な事例として、3、4年生の上の方で、釘打ちをしているところがございます。開隆堂さんは「トントンくぎ打ち、コンコンビー玉」というタイトルで、ビー玉を転がすコースづくりをしています。

一方、日文さんのほうですが、「くぎうちトントン」の題材で、もう裂けてしまったヒビのところに、さらに釘を打ち込んでみたり、どんどん打つてみたら髪の毛のようになってしまったとか、あるいは釘の高さを変えて打つてみて、大きさの違うものを使って、親子に見せてみたりと。こちらも、やはり何でもよい、どんなものでもいいんだよということを示していて、自由な発想を受け入れてもらえるという、その発想の膨らみを感じました。

昨今の子どもたち、自己肯定感の低い子どもたちが多い中で、何をやってもいいんだという自己肯定感を持つことができるという意味で、私は日文さんのほうを推薦したいと思います。

【小田嶋教育長】

ありがとうございます。子どもたちの自己肯定感への結びつきという観点からも今、日文のほうを推薦していただきました。

ほかの委員の方、いかがでしょう。

中村委員、どうぞ。

【中村委員】

今、岩切委員のほうから、黒板のような形でめあてが書いてある導入がわかりやすいという御説明があったんですけれども、私は、終わり方も日文がいいと思いました。

あと、単元ごとに「気をつけよう」「片づけよう」ということまで書いてあるんです。私は図画工作においては、もちろん表現することも大事ですけども、いろいろなお道具の使い方をしっかりと身につけるとともに、使ったものはちゃんと片づけるということまで身につけてもらいたい、学んでもらいたいと思いましたので、その点ではどちらも書いてあるんですけども、日文のほうがわかりやすいのかなと思いました。

【小田嶋教育長】

日文さん4人ということで、岡田委員はいかがでしょうか。

【岡田委員】

私は、かわさき教育プランの視点に立ったとき、両者をその視点で見たときに、やっぱり日文さんが、つながり広場というような形で、発達段階に応じてさらに社会とか生活につながっていくような活動を掲載していること、それから、先ほど指摘がありましたように、吹き出しを使って題材についての対話をしている様子を示しているところと、それから多様性というところを考えたときに、一つの作品ではなく、いろいろな作品を出して、それぞれの作品のよさを見つめていくというようなところ、そういったところを踏まえると、やはり開隆堂さんと日文では、日文さんのほうを推したいというふうには思います。

【小田嶋教育長】

高橋委員は、ごめんなさい、まだ聞いていませんでした。

【高橋委員】

もう、ほかの委員の方々と重なるところが多いんですけども、掲載されている作品の幅が広いこととか、細かいことなんですけれど、1、2年生の低学年の教科書に関して言うと、日文さんは全ての単元が見開き1ページになっているのに対して、開隆堂さんは1ページずつで、開いたときに、右と左で別の単元を扱っているような部分があって、教科書を見たときに、やっぱり色ですとか、いろいろな形とか入ってきてしまうので、最初の導入のところで、少しちょっと気になるなというところがありました。

なので、日文さんがいいのではないかと思います。

【小田嶋教育長】

皆さん、日文ということで、私も結論的には日文のほうが、より適しているかなというふうに思っていますが、一つだけ、私の捉え方として、図画工作や美術という教科は、本当に子どもたちの創造力や感性を高める上で、大変重要な教科だと思っています、言葉から想像を広げてという、巻頭に、日文のほうの巻頭には想像する力というのがうたわれていて、単元としても「言葉から想像を広げて」とか、あるいは低学年だと「ことばのかたち」、あるいは3、4年生では「ことばから形・色」とか、言葉から物語、言葉からイメージを膨らませて作品につなげていくという、そういった展開というのは、私も想像力ということは非常に重要視していますので、そういった点からも、日文を薦めたいと思います。

では、以上から図画工作科については、日文を採択するという事で、決定してよろしいでしょうか。

【各委員】

<可決>

【小田嶋教育長】

では、そのように決定いたします。

⑩ 家庭

【小田嶋教育長】

では、続いて家庭科の審査をしてみたいと思います。

では、高橋委員、どうぞ。

【高橋委員】

まず、家庭科なんですけれども、調理や裁縫など、大変活動が非常に重要になってくる教科ですので、活動のしやすさという観点から拝見しました。東京書籍は紙面がA4ですので、写真も大きく、レイアウトにも余裕があり、とても見やすいなというふうに思いました。また、基礎手順の一覧が、目次の中にも、家庭科の基礎ということで載っているのと、それから裁縫、ミシン、調理の詳細な手順や方法が巻末資料として別に掲載されており、授業で参考にするだけでなく、子どもが家に帰って、家庭で実践するときにも、自分ですぐ開いて参考にできるところが非常によいなというふうに思いました。

それから家庭科は、火を使ったり針を使ったり、危険が伴う活動が多いですけれども、安全に関する説明についても、東京書籍さんのほうが、巻末で見開きのページで非常に詳しく説明がされていて、またいい例、悪い例とか、場合分けがされていたり、それから補助的なテキストもあったりして、とてもわかりやすいかなというふうに思いました。

それから、5年生の一番最初の単元の一番最初のページが、家庭の役割のイラストになっているんですけれども、どちらも家族皆で、子どもからお父さんお母さんおじいちゃんおばあちゃん、皆で役割を分担するように書かれているんですけれども、朝の家事分担に注目してみると、東京書籍はお父さんが布団を片づけて、お母さんがごはんをつくって、洗濯物はお父さんとお母さんがふたりで干してというようなものになっているのに対して、開隆堂さんは、お母さんが洗濯をして、お母さんがごはんをつくって、お父さんはゴミ出しをするというようなものになっていて、男女共同参画ということに関しては、東京書籍さんのほうが、より配慮しているのかなというふうに思いました。

それから、新しく入ったSDGsということに関してなんですけれども、開隆堂さんは6年生の最終単元の、「持続可能な社会を生きる」というところで、2年間全体の活動を振り返りながら持続可能な社会について考えるのに対して、東京書籍さんは5年生の第4単元で、「持続可能な暮

らしへ 物やお金の使い方」、この単元で消費活動と結びつけてSDGsについて考える構成になっています。

より、子どもが消費活動という身近な活動を通して、より深くSDGsについて考えることができるのではないかというふうに感じました。

以上から、私は東京書籍さんのほうがいいかなというふうに思います。

【小田嶋教育長】

ほかの委員の方、いかがでしょう。

岩切委員。

【岩切委員】

東京書籍さんと開隆堂さん、この2社とも、よりよい生活をしていくために必要な、具体的な知識、技能等が非常にわかりやすく記載しておりますし、それから気づき、理解、発展につながる流れというの、非常に工夫がされていたというふうに思いました。

また、作業時の説明など、右利きの子どもだけではなく、左利きの事例も、両者とも掲載されていますので、どちらでも、やはり児童にわかりやすいつくりになっているなというふうに思いました。

また、中学への学習につなげるためのまとめの振り返りというのものも、両者ともされているということで、学習の継続性を感じさせる記載になっていました。

東京書籍さんのほうは、「学習の流れ」という項目の中で、ステップ1、ステップ2、ステップ3と、視覚的に意識させる円グラフを用いています。

それから、開隆堂さんは「学習のめあて」という項目で、「1 見つける・気づく」、「2 わかる・できる」、「3 生かす・深める」で、チェックを入れるボックスを用意していてわかりやすいなというふうに思いました。

具体的な内容についての比較をしてみました。調理実習のところ、青菜のおひたしと、ゆでいもの章を比較いたしました。東京書籍さんの場合には、見開きになっておりまして、見開いたところを横使いで、「1 洗う」、「2 ゆでる」、「3 切る」、「4 盛りつける・試食する」、「5 かたづける」を掲載しています。

そして、開隆堂さんのほうは、1ページで、「1 洗う」、「2 ゆでる」、「3 切る」が記載されています。大きく書かれているということと、あともう一つ、行動の完了まで記載されているという点で、私は東京書籍のほうがわかりやすいかなというふうに思いました。

同様に、洗濯の手順についても比較させていただきましたが、同じような傾向が見られました。

ただ、両者とも、アンケートにも実はあったんですけども、このアンケートにも指摘がございましたように、実は家族の団らんのページというのがございまして、開隆堂さんの「いっしょにほっとタイム」というところとか、あと東京書籍さんもあるんですけども、どちらも家族の構成が非常にステレオタイプな家族構成になっておりまして、もっともっと家族のあり方というのが、今複雑に変化している中で、少し配慮していただきたいなというところがございました。

やはり、シングルマザーであったり、あるいは単身赴任をされている家であったり、共働きの家庭、そういったことを考えていくと、その複雑化した家庭環境にある子どもたちが、こういう

ことがやりたくてもできないような実情にあることも、少し教科書会社さんのほうでも配慮願えたらなということ、少し思いました。

したがって、私はこの二つを比較したときには、具体的に書かれている東京書籍さんがいいかなというふうに思いました。

【小田嶋教育長】

ありがとうございます。

両者を比較しながら、よりわかりやすいほうということと、あと各教科書会社への課題として考えることの、今注文というか、お願いみたいなこともお話ししていただきました。

いかがでしょうか。

中村委員。

【中村委員】

今、お二人の委員がおっしゃったことと、ほとんどかぶさるんですけども。私も東京書籍の教科書を最初に開いたときに、私の生活というところで、お父さんが布団をたたんでいたり、洗濯物を干していたりするのは、男女共同参画の時代には、すごく大事なことなのかなと思っていて、そういう視点から見ると、東京書籍がいいと思いました。

それから、やはり大きいだけあって、見やすいですね。ということで、私は東京書籍を推薦したいと思います。

【小田嶋教育長】

岡田委員、どうぞ。

【岡田委員】

各委員がお話ししてくださいました、「川崎の子どもが学習を進めていく上での視点」というところで見ていって、私も結論的にいうと、東書さんがいいというふうに思いました。書き込めるというようなこともありますし、主体的・対話的で深い学びにかかわる構成のところでは、「課題発見」、それから「課題解決・実践活動」から、「評価改善」というふうな形で示されておりました。開隆堂さんのほうは、「見つける・気づく」、「わかる・できる」、「生かす・深める」という、そのスリーステップでありますけれども、「課題発見」からスタートしていくという、明確に「課題発見」と言っている点、これもいいなというふうに思って、東書がいいと思います。

【小田嶋教育長】

ありがとうございます。

小原委員はいかがでしょう。

【小原委員】

ほぼ、ほかの委員さんが皆おっしゃっているところで、私も同じになっているんですけども、最初にこの教科書を並べてみて感じていたのが、開隆堂さんのほうは、ページを進めていくと、

「安全に実習しよう」から見えるんですね、ページが。その後、「家族の生活再発見」になって、「クッキング はじめの一步」という感じなんです。実習のイメージがぱっと見えているのに、その次のページは「家族の生活再発見」みたいな感じになって、またクッキングというところへつながっていくという、一回ちょっと切れる感じがしていたんです。

東書さんのほうには、そういう感じではなく、「私の生活、大発見！」から始まって、家庭科室の探検があって、その後、調理のほうに入っていくんです。このちぐはぐ感がすごく最初に感じてしまって、「クッキング はじめの一步」というところで、ページをもう1枚めくって12ページになると、「ゆでて食べよう」が出てきてしまうんです。だけど、「ゆでて食べよう」が出てきているんですが、お湯を沸かすとか、調理器具の取扱い、お湯を沸かす、お茶を入れるというところまでが見開きで出ているというところで、ゆでて食べるというものがないような感じになってしまっていると。次のページには出ているんですけども、その下に、「ゆでて食べよう」の下には、「どのように加熱するのだろう」というふうに書いてはあるんですけども、どうしても「ゆでて食べよう」というふうになっているのに、食べるものをゆでている状況には見えないというのが、ちょっとすごく違和感を感じていたところなんです。

東京書籍さんのほうは、そういう形ではなく、一連の流れで、ゆでるなどの行程が入っていますので、選ぶとすれば東京書籍さんということになります。

【小田嶋教育長】

皆さん東京書籍を推薦されていて、私も結論から言うと東京書籍で、また一つだけちょっと皆さんと違う視点でお話しさせていただきますと、地域の一員としての子どもたちの位置づけといいますか、扱っているところなんですけど、東京書籍は、その具体例ですとか、かかわりの例示というのがあります。6ページ使っているんですけど、開隆堂は4ページ使って、そういった例示がないということで、子どもたちにとっては、その地域とのかかわりを、具体的にはいろいろなものがあるわけですが、それを改めて自覚する上で、そういった例示、具体例が出ていたのはいいいのかなというふうに思いました。

川崎の教育で一番柱にしていますキャリア在り方生き方教育で、「わたしたちのまち川崎」という視点、あと今、全庁的に川崎市が進めている、三つの大きな施策で、地域包括ケアシステムの推進ですとか、新たなコミュニティ施策、また防災の取組、どれも地域とのかかわりが非常に大事で、私は、去年、おととしと区長をやっていたわけですが、宮前区の区長をやりながら、子どもたちが地域のことを考える上で、いろいろなかかわりがあるんですけど、それを意識的にやっていくことで、そういった川崎市の施策にもつながっていくだろうということで、そういった部分も非常に重要ななと思っています。

そういったことを含めて、総合的に考えて、私も東京書籍を推薦したいと思います。

以上から、家庭科につきましては、東京書籍ということで採択したいと思いますけど、よろしいでしょうか。

【各委員】

<可決>

【小田嶋教育長】

では、そのように決定いたします。

⑪ 保健

【小田嶋教育長】

続きまして、保健の採択に入っていきます。

保健は2社ではなく5社ということです。

では、御意見よろしく申し上げます。

岡田委員。

【岡田委員】

「川崎の子どもが学習を進めていく上での視点」、保健は三つ取り上げております。今ありましたように、5社であります。5社の中で、私は学研と東書がいいなというふうに思いました。

その中で、学研さんなんですが、見開き2ページで示している。これはとても見やすくいいなというふうに思います。

それから、「かがくの目」というような視点でそこに記されているということ、それから、かわさき教育プランに立ったときに、各社とも「病気の予防」とか「感染症」とかいうのは取り上げているんですけども、そこに「生活習慣病」についても取り上げられていて、さらにこの学研では、「いじめ」についてが記されているということでもあります。こういう点と、それから主体的・対話的で深い学びにかかわるところでは、「つかむ」、「考える・調べる」、「まとめる・深める」というような流れを設定しておりまして、これはとてもいいなと思いました。

そして、各社の中で違いが出てくるものの一つが、実は「大人に近づく体」というような言葉で、発達段階に応じた体の変化とか、そういったものを記していましたが、学研は「大人に近づく体」ということで、衣服を身につけている写真とシルエットで示しておりました。これが、私はいいなというふうに思いました。

以上のことから、私は学研がいいというふうに思います。

【小田嶋教育長】

ありがとうございます。

中村委員、どうぞ。

【中村委員】

私も学研がいいと思います。まず、3・4年の教科書を開くと、「健康って、どんなこと？」というページがあるんですけども、「一人一人が『かぎりない力』とすてきな『自分らしさ』を持っています。もちろん、あなたも」ということで、いろいろな写真が出ているんですけども、障害のある方も載っていて、健康ってどういうことなんだろうということをよく考えられる仕組みになっていると思います。

それから、今、岡田委員もおっしゃったんですけれども、発達段階のところで、体の変化に子どもたちはいろいろ悩むと思うんですけれども、どういうふうに悩むかということが具体的に書かれているんですね。一人一人違うということを丁寧に書かれているのは学研だと思いましたし、健康というものは、単に体が健康なだけではなくて、心の悩みとか不安という点についても詳しく触れられていました。5、6年生のほうでは、「いじわるやいやなこと ～これって、いじめ？～」ということまで書いてあるので、心の健康という面でも、とても大事なことがまとめられていて、学研がいいのではないかと思います。

【小田嶋教育長】

ありがとうございます。心の面での悩みとかいじめということで、それも含めまして、岡田委員、中村委員から学研を推薦していただいています。

ほかの委員の皆さん、いかがでしょうか。

高橋委員。

【高橋委員】

私も学研がいいと思っています。見開き2ページで一つの単元構成が見やすいですし、情報量としてもちょうどいいのかなというふうに思いました。

また、先ほど岡田先生が言われた、5、6年生の教科書の「不安やなやみへの対処」のところで、非常に記述も詳しいですし、ページだと16、17ページの見開きのところで、「具体的になやみへの対処を考えてみよう」というところに、困ったときの相談窓口も一緒に掲載されたりしていて、単に知識を学ぶのではなくて、子どもが学んだことを実生活に役立たせられるような、そういうつくりになっているのかなというふうに思いました。

【小田嶋教育長】

ありがとうございます。

岩切委員。

【岩切委員】

私も同様に、川崎の教育プランの観点からも、「いじめ」の扱いについてきちんと対応が書かれているということは重要だと思っていて、大日本印刷と、それから学研さんの2社が、記載があったということで、この2社のほうを読ませていただきましたが、特に学研さんのほうの、先ほど来、挙げられている、「いじわるやいやなこと ～これって、いじめ？～」という項目の中には、する側とされる側、その両方の視点をきちんと入れているという意味で、非常にいいことだなというふうに思いました。

やはり、今のこのいじめの問題は命にもかかわってくる問題ですので、きちんと扱って勉強ができるような環境を整えるということは、教師にとっても、子どもたちにとっても大事なことでないかなということで、私も学研がいいと思います。

【小田嶋教育長】

小原委員、お願いします。

【小原委員】

私も、同じように学研でよろしいかと思えます。理由も先ほどの委員がおっしゃられたように、「いじめ」の掲載があるということ、あと紙面的に見やすい構成になっているかなというふうに思えます。

以上です。

【小田嶋教育長】

私も、ほぼ皆さんと同様ですので、繰り返しはしませんが、皆さん学研ということで、保健につきましては、学研ということで採択してよろしいでしょうか。

【各委員】

<可決>

【小田嶋教育長】

では、そのように決定いたします。

⑫ 英語

【小田嶋教育長】

では、次に英語の審査をしてみたいと思います。

英語は今回初めてということで、出版社数も多いですし、中身もかなりいろいろな、内容も豊富ですが、では英語科につきまして、御意見をお願いいたします。

高橋委員からお願いします。

【高橋委員】

外国語が教科化されて初めて選ぶ教科書ということで、丁寧に各社見させていただきました。全体としては、文科省が作成して、今年度まで使用されている「We Can!」ですよね、あっていますか。「We Can!」を踏襲する形でありつつも、各社それぞれに個性が出ているなというふうに感じました。

いろいろな観点で細かくは見たんですけれども、きょうは、書く活動、既習事項の振り返り、先生の授業準備という3点からお話をします。

「聞く」、「話す」、「読む」、「書く」の四つ活動が外国語では挙げられておりますが、私は、子どもが苦手になりやすいのは、「書く」活動なのではないかと考えまして、まず、書く活動のしやすさという観点で見ました。

英字フォントについては、東京書籍、教育出版、光村が、見出し字を含めて、統一感や読みや

すさがあり、特に東京書籍は、4線の真ん中の段の幅が他社より広がっており、読みやすさも書きやすさも際立っているように感じました。

紙面の見出しやタイトル、あとイラストの中などに、さまざまなフォントが使われている会社さんもありましたが、先ほど生活科でもちょっと触れたんですけれども、アルファベットの字体の書き方を正確に把握していない子どもが混乱してしまうのではないかなというふうに感じました。

それから、辞書機能についてなんですが、東京書籍は「Picture Dictionary」ということで、絵辞典が別冊になっていまして、子どもたちが英単語、英語を書き写す作業をするのに、書く場所のすぐ横に、手元に持ってこられるということで、非常に扱いやすいなというふうに思いました。

他社さんは、問題のすぐ近く、問題の文章の下に英単語が書いてあったり、1枚めくったすぐ近くに使う単語が書いてあることが多いんですけれども、それから巻末に絵辞典や単語リストがついている場合が多かったんですけれども、問題と一緒に書かれている場合は、その紙面の大きさに載せる単語の数が限られてしまうので、子どもが、本当はほかのことを使いたいと思っても、そこに書いてあるのしか使えないというようなことがもしかしてあるのかなと思ったり、あと巻末に英単語のリストなりが載っている場合は、めくって行ったり来たりしながら字を書かなければいけないというような場面もあるので、非常に正確に書き写しづらいのかなというふうに感じました。

また、書く練習をすることについてですけれども、単元末にまとめて文字を書く活動をする構成の出版社が多い中で、東京書籍は毎時間少しずつ書く練習をする構成になっていて、子どもが書く活動が嫌いにならないような工夫がされているなというふうに感じました。

子どもにとって、授業の1時間をずっとアルファベットの練習をするとか、英単語を書き写す作業をするというのは、あまり楽しくないのではないかなというふうに感じております。

開隆堂も、書く活動については巻末に充実した練習ページがあって、まとめてやることもできますし、物によってはユニットに分けて活動できる部分もあるようなのですが、全体的に、少し1回の書く量が多いのかなというふうに感じました。

次の観点ですが、学習したことの定着や活用のために、既習事項の振り返りやすさというところを見ました。学校図書は、前の学年と当該学年で習ったことが巻頭や巻末に載っており、子どもが活動中に自分でも振り返ることができるようになっていました。

東京書籍は別冊の「Picture Dictionary」のほうに、5、6年生の習った表現がまとめて載っているので、子どもが発展した活動をしているときに、「前に習ったものを使いたいな」というときに、簡単に参照ができるようになっていると思いました。

さらに、東京書籍さんは単元が幾つかの大単元にまとまっているんですけれども、その大単元のまとめ活動のページに、各その前の小単元ごとに作成したワークシートを順番に貼っていく構成になっていて、貼ったものを大単元のまとめ活動のときに参照できるような構成になっています。

参照しやすさというところもありますし、習ったことをもう一度使って活動によって振り返るという意味でも、非常にいい構成だなというふうに思いました。

最後の、先生の授業準備のしやすさですけれども、これは先生方の負担がどのぐらいになるのかということでもあります。外国語の指導については、まだ始まったばかりで授業研究ですとか、

教材開発もほかの教科に比べてそこまで進んでいない中では、非常に先生方の授業の準備の負担というのは、重要なポイントになると思います。

展示会のアンケートでも、英語を取り入れるに当たって、先生方の準備・負担が大きくなるのではないかという懸念される心配される声が多くありました。

東京書籍は、単元のまとめ活動がスリーステップで丁寧に説明されていて、とてもわかりやすく、活動ごとにワークシートもついているので、先生の準備の負担が少ないように感じました。ただ、これは外国語の指導の立ち上がりの時期としては、このように準備の負担が少ないのがよいんじゃないかという意味でありまして、今後どんどん外国語の指導がどんどん進んでいって、先生方の指導力が向上し、研究成果が蓄積されていく中で、例えば説明が記述が少ないですとか、成果物を先生方が自由につくれるような、そういう指導に幅が出るような教科書に移行するということも十分考えられるというふうに思っております。

以上の観点から、今回の採択では、東京書籍がよろしいかなというふうに思っております。

繰り返しになりますが、次回の採択のときに、またその状況にあわせて見直すということも、やっていただければというふうに思います。

【小田嶋教育長】

高橋委員から、三つの観点ですね、書く、あと既習事項の振り返り、あと教員の負担という、その三つの観点からお話いただきまして、東京書籍を推薦するということでした。

ほかの委員の方、よろしくお願いします。

では、中村委員。

【中村委員】

今、高橋委員のほうから、学習に関することをとても詳しく述べていただきましたので、ほかの観点で申し上げたいと思います。

私は、英語が入ってきたことで、子どもたちには、「外国に行ってみたいな」とか、「いろいろな国ってこんなに違っておもしろいんだ」とか、「日本のことも伝えたい」というような、わくわくした気持ちで勉強してもらいたいんですね。そういう観点で見ますと、東京書籍がいいのかなと思いました。

東京書籍の教科書には、いろいろな国の写真がたくさん載っていますし、お料理とか、いろいろな文化とか人々が載ってまして、「世界って広いんだな」ということを感じられるものですから、そういう意味では、英語の時間は、ちょっと心を世界に広げていくような授業になってほしいという思いがありまして、東京書籍がいいのではないかと思います。

【小田嶋教育長】

また別の観点から東京書籍を推薦するという、中村委員のお話でした。

ほかの委員の方からも、お願いします。

では、小原委員、お願いします。

【小原委員】

私も東京書籍で考えています。既習事項を活用して、ペアやグループ、または学級全体でコミュニケーション活動を行うという、「Enjoy Communication」というのが単元に設けられていたりします。

言語活動の充実というところも大事であろうというふうに考えていますので、そこも考慮して考えています。

あと、先ほど中村委員がおっしゃったところで、各単元の最後のところに、単元の内容に関連して国際理解・異文化理解について扱う「Over the Horizon」というのがあるので、やはりこれもいい教材になっているというふうに思っていますので、東京書籍というふうに考えています。

以上です。

【小田嶋教育長】

小原委員も東京書籍を推薦するという事です。

岡田委員、どうぞ。

【岡田教育長職務代理者】

「川崎の子どもが学習を進めていく上の視点」というところで、ここも三つ挙げられております。既に先行でやっています「We Can!」ですね、そこを各社とも踏まえているんだろうなというふうに思いましたが、最初に各社を見たときに、情報が多過ぎるというか何と言うか、逆に英語嫌いになっちゃったら嫌だなという視点がありまして、そういったところをどういうふうにしていったらいいのかなとかいうところを思いながら、私は先ほどの三つの視点でいくと、光村さんと、それから先ほどから各委員が挙げられています東書ですね、これがいいなというふうに思いました。

それで、東書の場合は、例えばこれは6年生の30ページなんですけれども、ここにポートフォリオになるんじゃないかなと思うような、「Check Your Steps」ということで、10ページ、18ページ、26ページというふうなところで、自分の学びをそこでもう一回チェックして行って、ポートフォリオになっていくというふうなところが入っていました。

それから、私が教科書選定で視点にしている大きな割合で私の中に占めているのが、かわさき教育プランであります。そのときに、東書さんが取り上げている、国際異文化理解を扱うところというのは、これはとてもいいなというふうに思いました。

それから、先ほど高橋委員が取り上げていただきました、この「Picture Dictionary」はとてもいいなというふうに、私は思いました。これは、とても学びの中で使える教材になっているなというふうに思ひまして、というところから、光村と東書では、東書がいいなというふうに思います。

【小田嶋教育長】

岩切委員、お願いします。

【岩切委員】

今、ほかの方もおっしゃっていましたが、小学校のうちから英語を学ばなければいけない状態になっていますので、子どもたちにとっては、すごく負担になると思うんです。ですから、英語を学んで何かやってみたいという、そういうポジティブな気持ちになってもらえるような教科書の構成ということで、外国の紹介であったり、それからあと巻末のところに、いろいろなアルファベットのカードをつくったりすることができるようになっていものが結構あったと思うんですけど、そういったものが充実しているとか、そういった観点で、親しみやすさというところを見せていただいたんですけども、先ほど来、話も出ていますように、東京書籍さんだけがこの「Picture Dictionary」といった、ワークブックに相当するようなものがありまして、こういったものの利用のしやすさとか、活用のしやすさということを考えると、私も東京書籍さんが使いやすいのではないかなというふうに思いました。

【小田嶋教育長】

ありがとうございます。

先ほど、岡田委員からありましたように、情報が多過ぎて、本当に英語嫌いをつくってしまったら困るなという懸念というのは、私も感じていて、アンケートにも随分それが書かれていたと思うんですが、私も東京書籍でいいとは思っていますが、先ほど岡田委員も言われた、光村出版も、割とシンプルでわかりやすかったなというふうに思っています。

導入が丁寧だということと、あと教科書をあけていくと、「5年生でできるようになること」とCAN-DOが明示されていて、その後に「4つの『たいせつ』」ということで、英語でコミュニケーションをとる上でのポイントが書いてあったり、あと各ページ、各活動が見開きで2ページで右上に学習の過程を明示して、ゴールが明示されているという点で、シンプルなのでいいかなと。逆に言うと、シンプルであり説明等がない分、指導が難しくなるという面もあるかなとは思いますが、いずれにしても、どの教科書を使うにしても、子どもたちが本当にポジティブに世界に目を向けて、英語を学ぶ楽しさを感じられるような教科書で授業をつくっていかなくちゃいけないというふうに考えています。

全体では、東書ということでしたので、私も含めて、英語科につきましては、初めての採択になりますが、東京書籍を採択したいと思えます。よろしいでしょうか。

【各委員】

<可決>

【小田嶋教育長】

では、そのように決定いたします。

⑬ 道徳

【小田嶋教育長】

では、小学校の採択は次で最後になりますが、道徳の採択に移ります。

道徳につきましては、教科化されて、2年前に採択されて、今、光村の教科書を使って2年現場で実践していただいているということです。

そのときの採択にかかわった委員としては、小原委員と中村委員がかかわって、後でまたそういったことも含めて御意見を伺えればなと思いますが、では道徳につきまして、御意見をよろしくお願いします。

岡田委員。

【岡田教育長職務代理者】

私は、道徳は初めて見るということで、全部で8社から出版されておりました。とても、各社とも工夫していて、いいなというふうに思いながら見させていただきました。

「川崎の子どもが学習を進めていく上での視点」が三つ取り上げられております。そういったところを踏まえて見ていきたいというふうに思います。

まず、現行の光村でございますけれども、例えば道徳の2年生のところの4ページでは、「どくとくの時間は、今よりもっとよい生き方ができるよう考えていく時間です。」ということで、「話し合ってみよう」、それから「演じてみよう」、「読んでみよう」、「書いてみよう」ということで、「さまざまな考え方があることを、大切にしていこう」というふうに、最初に道徳の時間がどんな時間なのか、これが明示されておりました。

それから、次のところに、どんな学習なのかがわかるように、「この本で学ぶみなさんへ」ということで、「この本では次の印がされています」ということで、キャラクターが出てきて、それぞれのキャラクターがどんな意味を持っているのかということも、ここで示されています。

これはもちろん、光村さんだけではなくて、いろいろな会社さんが工夫されているところだというふうに思います。

そういった中で、私が光村さんいいなと思ったのは、子どもの権利条約が取り上げられているという点。それから、世界人権宣言についても明確に取り上げられているという、この2点はやっぱりいいなというふうに思いました。

もちろん、他社さんでも取り上げているところはあるんですけども、ここの二つを明確に取り上げられているというところでもあります。

それから、かわさき教育プランに関連していきますと、光村では、「心を通わそう」ということを設けまして、よりよい人間関係づくりに関連する内容になっておりまして、これも道徳をさらに人間関係と関連づけていながらいく。川崎が既に実施しております、共生＊共育プログラムにもつながるものであるなというふうに感じました。

それから、先ほどありましたように、実は2年前にこれが決まって、まだ2年ということで、継続でどうなのかな、もう少し継続で様子を、使い勝手とか現場の先生方の声をいただいて見ていくほうが、モアベターじゃないかなという思いがありまして、私はこの光村がいいというふうに思います。

【小田嶋教育長】

ありがとうございました。2年前に採択されて、2年間今使っているという中での、使い勝手というか、あるいは課題というか、そういったものも、またこれから出てくるのかもしれませんが、指導主事のほうで、そのへんの情報を少しお知らせいただければと思いますが、いかがでしょう。

【岡部カリキュラムセンター指導主事】

現場の先生方からは、使うのが難しいという声が多数上がっているわけではありません。教科書の進め方で取り組んでいらっしゃる先生方も多くいますし、または、子どもたちの実態にあわせて、いろいろな発問の仕方を変えたりというふうに、変化を加えながら授業をされている先生方もいらっしゃいます。

【小田嶋教育長】

ありがとうございます。

また、参考にさせていただければと思いますが、ほかの委員の方、いかがでしょうか。

高橋委員。

【高橋委員】

私も、採択してから2年しかまだたっていないので、特に問題がなければ、現行の光村でいいと思っているんですけども、特に、「なんだろう なんだろう」という漫画が掲載されているんですけども、子どもの身近なことを書きながらも、漫画だけでも、すごく大人も深く考えさせられるような、すごくいい教材だというふうに思っております。

【小田嶋教育長】

ありがとうございます。

ほかの委員の方、いかがですか。

岩切委員。

【岩切委員】

私も、道徳の教科書は今回初めて拝見させていただいたんですが、ボリュームが多いのに非常にびっくりいたしました。

それから、アンケートの中にも少しありましたけれども、「道徳ノート」というものを付随させている会社さんもありますが、道徳という教科そのものが、社会の中で学んでいく、集団の中でとか、周囲の人たちとどうやってうまくやっていくかというような中で育まれていく教科かなというふうに思っているんですが、そういったことを考えますと、個人ワークの非常に時間が割かれるようなノートで、個人だけで向き合うというよりは、お友達の中とか、教室の中で皆の意見を聞きながら、本当はどうなんだろうと自分で振り返るような、そういった設計になっている教科書がいいかなというふうに思いました。

特にどれというふうには申し上げませんが、私はそういう意味では、子どもたちに負担

の少ないものもいいのかなというふうに思いました。

したがって、今回特に、今現行の教科書で不都合がないのであれば、そのまま光村を継承していただくのがよろしいかと思えます。

【小田嶋教育長】

ありがとうございます。付属のノートの扱いについては、2年前のときにも話題になって、そういう形でないほうがいいだろうということで、採択した経緯があると思えます。

小原委員、どうぞ。

【小原委員】

2年前、道徳の採択にかかわってはいたんですけども、そのときにもやはり、ノートの話があったと思えます。そのときに話した内容というのは、細かいことはちょっと覚えてはいませんけれども、確かに書くことに関して、物語も読まなければいけないし、書かなければいけないというところの大変さや、また国語との関係とか、そういうことも当時話したように記憶をしています。

先ほどの学校でのお話を指導主事のほうから言っていたいただいて、2年間たってどうであろうかというところを踏まえて私も考えたいというふうに思っていたので、今の指導主事のお話から感じると、2年前に決めた光村という教科書に関して、それほどまだ、大変だとかということがないのであれば、また継続で研究を重ねていただきたいというふうには考えています。

以上です。

【小田嶋教育長】

では、中村委員。

【中村委員】

私も、2年前に道徳の教科書採択に携わりましたので、前回の議事録とか、自分なりにまとめた資料を見返した上で、今回の教科書を読ませていただきました。

私は、今回も前回同様に学研と光村で悩みました。学研は、自由な思いや意見を引き出せそうですし、光村は教材自体に力があるとともに、光村の1年から6年までの、全ての扉のところに書かれた、「みんな生きている みんなで生きている」ということが、川崎の教育方針と一致していると考えられるからです。

また、教科書をつくる皆様は本当によく勉強されていらっしゃるようで、前回と比べてみるとよくわかるんですけども、どの会社も少しずつ工夫や改善がされており、それぞれの教科書のよい点を取り入れて改版していらっしゃるの、違和感を覚える点は少なくなってきましたし、それぞれの工夫がすばらしいと思えました。

それでも、今回は皆さんがおっしゃっているように、前回同様に、光村を選びたいと思えます。その理由は、まだ2年しかたっていないということです。ほかの教科もそうですけれども、特に道徳は教え込むということよりも、児童が考える授業を展開しなければなりません。ですから、本当に難しいんです。教材を読み込み、児童が主体的、協働的に考えられる発問をするのは、と

でも難しいですので、特に現在は若い経験の浅い先生が多いことを考えると、道徳の研究蓄積を生かして授業をしていく必要がありますので、今は変えずに、光村を継続したほうがいいと思っています。

ただし、4年後の採択の時には、蓄積がありますので、それを踏まえてどのような教科書にしたほうがいいかというのは、改めて考えたほうがいいというふうに思っております。

【小田嶋教育長】

ありがとうございます。

道徳のあり方そのものですよね。考え、議論する道徳ということ。また、先ほど岩切委員からもありましたように、個人ではなく生活の中、体験の中、集団の中、かかわりの中で考えていくべきだろうということで、そういった実践、今、川崎の中で進めているところかと思えます。

私も、そういった意味で、光村の教科書を使つての実践をもう少し積み重ねていってほしいなと思いますので、皆さん御指摘あったように、私は光村の中で、またほかの教科書と比べる中でいいなと思ったのは、「つなげよう」のところで、関連する本の紹介が出てきているというようなところがまた特徴的で、一つの魅力かなと思いました。

では、道徳につきましては、光村出版を採択するというところでよろしいでしょうか。

【各委員】

<可決>

【小田嶋教育長】

では、そのように決定いたします。

それでは、小学校の採択、全て終わりましたので、全教科の採択結果を確認したいと思います。

国語は、光村図書出版。

書写は、光村図書出版。

社会は、教育出版。

地図は、帝国書院。

算数は、教育出版。

理科は、東京書籍。

生活は、東京書籍。

音楽は、教育芸術社。

図画工作は、日本文教出版。

家庭は、東京書籍。

保健は、学研教育みらい。

英語は、東京書籍。

道徳は、光村図書出版。

以上のような採択結果となりましたが、よろしいでしょうか。

【各委員】

<了承>

【小田嶋教育長】

それでは、議案第28号はそのように決定いたします。

ここで、15分ほど休憩をとりたいと思いますが、いかがでしょうか。

【各委員】

<了承>

【小田嶋教育長】

では、休憩をとりたいと思います。

再開は14時40分ということにさせていただきます。

(14時25分 休憩)

(14時40分 再開)

議案第29号 令和2年度使用中学校教科用図書の採択について

【小田嶋教育長】

ただいまから、教育委員会を再開いたします。

次に、議案第29号「令和2年度使用中学校教科用図書の採択について」の説明を、指導課長、お願いいたします。

【細見指導課長】

よろしくお願ひいたします。

「議案第29号 令和2年度使用中学校教科用図書の採択について」御説明申し上げます。

中学校が使用する教科用図書につきましては、道徳を除く他の教科用図書は、今年度は4年に一度の採択がえが行われる年に当たりますが、令和3年度からの新しい学習指導要領の実施に伴い、令和2年度、来年度になります。中学校が使用する教科用図書の採択がえを行う予定となっております。

このため、本年度におきましては、現在使用している教科用図書と同一のもので採択を行うことについて、令和2年度川崎市使用教科用図書採択方針において定めたものでございます。

なお、令和2年度に使用する教科用図書につきましては、議案書の一覧表のとおりでございます。

御審議のほど、よろしくお願ひいたします。

【小田嶋教育長】

ただいまの説明から、中学校教科用図書につきましては、道徳を除く全ての教科用図書におきまして、ことしは4年に一度の採択がえが行われる年に当たりますが、令和3年度からの新しい学習指導要領の実施に伴い、令和2年度に新しい学習指導要領に対応した教科用図書の採択を行う予定であることを受けまして、現在使用している教科用図書と同一のものを採択する方針であるとのことでした。

このことについては、何か御質問等がございますか。

よろしいでしょうか。

【各委員】

<可決>

【小田嶋教育長】

それでは、議案第29号は原案のとおり採択することといたします。

議案第30号 令和2年度使用川崎高等学校附属中学校教科用図書の採択について

【小田嶋教育長】

続きまして、「議案第30号 令和2年度使用川崎高等学校附属中学校教科用図書の採択について」の説明を、指導課長、お願いいたします。

【細見指導課長】

それでは、「議案第30号 令和2年度使用川崎高等学校附属中学校教科用図書の採択について」御説明申し上げます。

川崎高等学校附属中学校の教科用図書につきましては、公立の中学校で、学校教育法第71条の規定により、高等学校における教育と一貫した教育を施すものについては、義務教育諸学校の教科用図書の無償措置に関する法律に基づき、学校ごとに種目ごとに採択を行うものと規定されておりますので、議案第29号とは別に採択を実施いたします。

附属中学校におきましても、今年度は4年に一度の採択がえが行われる年に当たりますが、令和3年度からの新しい学習指導要領の実施に伴い、令和2年度、来年度になりますが、附属中学校が使用する教科用図書の採択がえを行う予定となっております。

このため、本年度におきましては、現在使用している教科用図書と同一のもので採択を行うことについて、令和2年度川崎市使用教科用図書採択方針において定めたものでございます。

なお、令和2年度に使用する教科用図書につきましては、議案書の一覧表のとおりでございます。

御審議のほど、よろしくお願いいたします。

【小田嶋教育長】

ただいまの説明から、川崎高等学校附属中学校の教科用図書につきましても、ことしは4年に一度の採択がえが行われる年に当たりますが、令和3年度からの新しい学習指導要領の実施に伴い、令和2年度に新しい学習指導要領に対応した教科用図書の採択を行う予定であることを受けまして、現在使用している教科用図書と同一のものを採択する方針であるということでした。

何かご質問等がございますでしょうか。

よろしいですか。

では、議案第30号は原案のとおり採択してよろしいでしょうか。

【各委員】

<可決>

【小田嶋教育長】

では、そのように採択をいたします。

議案第31号 令和2年度使用高等学校教科用図書の採択について

【小田嶋教育長】

続きまして、「議案第31号 令和2年度使用高等学校教科用図書の採択について」の説明を、指導課長、お願いします。

【細見指導課長】

それでは、「議案第31号 令和2年度使用高等学校教科用図書の採択について」御説明申し上げます。

高等学校の教科用図書は、義務教育諸学校の教科用図書の無償措置に関する法律の適用を受けないため、学校が教科用図書目録に登録されたものの中から、毎年度、使用する教科用図書を選定しております。

初めに、「令和2年度使用教科用図書採択の観点（高等学校）」の資料をごらんください。こちらは、各学校に設置され、教科ごとに全ての教員で構成された「校内調査研究会」において、各学校の学校目標や教育方針等に即し、各教科の「教科目標」や「育成したい資質能力」などを示したものでございます。

次に、「令和2年度使用教科用図書採択候補一覧（高等学校）」の資料をごらんください。こちらは、「校内調査研究会」におきまして、選定候補として調査研究した調査結果報告書及び各学校で教科ごとに選任された教員で構成される「調査研究会」で作成した調査研究報告書をもとに、学校長を長とした「校内採択候補検討委員会」において、作成されたものでございます。複数の教科用図書の中から、採択候補の教科用図書に丸印をつけたものとなっております。

いずれの資料につきましても、教科用図書選定審議会において審議され、最終的に教育委員会において、高等学校で使用する教科用図書の採択を行うこととしております。

説明は以上でございます。御審議のほど、よろしく願いいたします。

【小田嶋教育長】

高等学校の教科用図書につきましては、毎年度学校が教科用図書目録に登録されたものの中から、採択を希望する教科用図書を選定することでした。

これまで、教科用図書選定審議会の審議結果及び補足意見や要望があった場合には、慎重に議論をしてまいりましたが、今年度はいかがでしょうか。

【細見指導課長】

教科用図書選定審議会におきましては、教育委員会の採択そのものに対する補足意見や要望等の意見はございませんでしたが、調査研究報告書につきましては、「採択の観点」に基づいて、教育目標や学校目標に基づいた採択がなされることはよいことであり、全日制と定時制において、それぞれ生徒の実態が違うが、そういったものにも配慮して教科書が選考されている。学校でどういう子どもたちを育てていきたいのか見てとれる。思いが伝わってくる。高校には専門学科があるが、たくさんの教科書を選んでいること、先生方がよく調査研究をしている等の御意見がございました。

以上でございます。

【小田嶋教育長】

審議会からは、御説明いただいたとおりで、採択そのものに対する意見や要望は特になかったということですが、委員の皆様から何か御質問や御意見等はございますか。

岩切委員、どうぞ。

【岩切委員】

一つ、質問になります。購入学年のところに、1、2、3とあるのは学年だと思うんですが、「普」は普通科なのかなとは思っているんですが、「ス」とか「ピ」というのがあるんですが、この凡例が何かというのを簡単に御紹介いただけないでしょうか。

【小田嶋教育長】

具体的にページでいいますと、今何ページを見れば。

【岩切委員】

採択候補一覧のところの、購入学年という列になります。

【小田嶋教育長】

1 ページ目を見ていいですか。1 ページ目の購入学年の、学年以外の部分ですね。

【辰口カリキュラムセンター担当課長】

すみません、説明させていただきます。普通の「普」という字は「普通科」になります。「生」、

生きるという字は「生活科学科」、「福」というのは「福祉科」、「理」というのは「理系」になります。それらの学科で、その教科書を選んでいるということになります。

例えば、幸高校全日制、ページでいうと12ページになります。例えば幸高校全日制的「ビ」と書いてあるのは「ビジネス教養科」が選んでいるものになります。「普」というのは「普通科」が選んでいるものになります。それぞれの学科を省略させていただいて記載しているものになりますので、よろしく願いいたします。

【小田嶋教育長】

岩切委員、よろしいでしょうか。

【岩切委員】

どこかに「ス」というのが。

【小田嶋教育長】

「スポーツ科」だと思います。橘高校の。

【辰口カリキュラムセンター担当課長】

橘高校の全日制「スポーツ科」になります。すみません。お願いします。

【小田嶋教育長】

ほかにはいかがですか。

よろしいでしょうか。

それでは、議案第31号は、原案のとおり、採択してよろしいでしょうか。

【各委員】

<可決>

【小田嶋教育長】

それでは、議案第31号は原案のとおり採択いたします。

議案第32号 令和2年度使用特別支援学校教科用図書の採択について（学校教育法第34条第1項検定済教科書）

議案第33号 令和2年度使用特別支援学校小中学部及び小中学校特別支援学級教科用図書の採択について（学校教育法第34条第1項文部科学省著作教科書）

議案第34号 令和2年度使用特別支援学校小中学部及び小中学校特別支援学級教科用図書の採択について（学校教育法附則第9条教科用図書）

議案第35号 令和2年度使用特別支援学校高等部教科用図書の採択について（学校教育法附則第9条教科用図書）

【小田嶋教育長】

続きまして、「議案第32号 令和2年度使用特別支援学校教科用図書の採択について（学校教育法第34条第1項検定済教科書）」、「議案第33号 令和2年度使用特別支援学校小中学部及び小中学校特別支援学級教科用図書の採択について（学校教育法第34条第1項文部科学省著作教科書）」、「議案第34号 令和2年度使用特別支援学校小中学部及び小中学校特別支援学級教科用図書の採択について（学校教育法附則第9条教科用図書）」、「議案第35号 令和2年度使用特別支援学校高等部教科用図書の採択について（学校教育法附則第9条教科用図書）」、これら議案4件につきましては、いずれも特別支援学校及び特別支援学級で使用する教科用図書の議案となりますので、議案4件を一括して審査したいと思います。御異議ございませんでしょうか。

【各委員】

<了承>

【小田嶋教育長】

それでは、議案4件を一括して審査いたします。

議案第32号から議案第35号の議案4件の説明を、指導課担当課長、お願いいたします。

【武田指導課担当課長】

それでは、「議案第32号 令和2年度使用特別支援学校教科用図書の採択について（学校教育法第34条第1項検定済教科書）」、「議案第33号 令和2年度使用特別支援学校小中学部及び小中学校特別支援学級教科用図書の採択について（学校教育法第34条第1項文部科学省著作教科書）」、「議案第34号 令和2年度使用特別支援学校小中学部及び小中学校特別支援学級教科用図書の採択について（学校教育法附則第9条教科用図書）」及び「議案第35号 令和2年度使用特別支援学校高等部教科用図書の採択について（学校教育法附則第9条教科用図書）」につきまして、まとめて御説明させていただきます。

はじめに、議案第32号から第35号までの資料をごらんください。特別支援学校及び特別支援学級で使用する教科用図書について、御説明させていただきます。

「1 特別支援学校及び特別支援学級で使用する教科用図書に関する法律」についてですが、教科用図書は、学校教育法第34条第1項に基づく「検定済教科書」と呼ばれる文部科学大臣の検定を経た教科用図書、それと「著作教科書」と呼ばれる文部科学省が著作の名義を有する教科用図書を使用しなければなりません。

しかし、学校教育法附則第9条に基づき、文部科学大臣の定めるところにより、「附則第9条図書」と呼ばれる学校教育法第34条第1項に規定する教科用図書以外の教科用図書を使用することができる、となっております。

次に、「2 特別支援学校及び特別支援学級で使用する教科用図書の種類」についてですが、特別支援学校及び特別支援学級で使用する教科用図書は、(1)から(3)までの3種類となります。

(1)は、学校教育法第34条第1項に基づく「文部科学省検定済教科書」でございます。(2)は、特別支援学校及び特別支援学級に在籍する児童生徒が学習内容をよりよく理解できるよう、

障害の種別に応じて文部科学省が作成した「著作教科書」でございます。(3)は、学校教育法附則第9条の規定による教科用図書で、市販されております絵本等の一般図書や当該学年よりも下の学年の検定済教科書、視覚障害等のある児童生徒のための検定済教科書を原典とする拡大教科書及び点字教科書でございます。

次に「3 特別支援学校及び特別支援学級で使用する教科用図書一覧」をごらんください。こちらは、議案ごとに該当する学校をお示ししたものでございます。

それでははじめに、「議案第32号 令和2年度使用特別支援学校教科用図書の採択について学校教育法第34条第1項検定済教科書」でございます。

議案書の1ページをごらんください。特別支援学校小中学部につきましては、小中学校同様の検定済教科書を使用して教育を行う場合、小中学校と同一の検定済教科書を採択するものでございます。

そのため、小学部につきましては、今年度採択した小学校教科用図書を採択するものでございます。

続きまして、議案書の6ページをごらんください。中学部につきましては、道徳を除く他の教科用図書は、今年度は4年に一度の採択がえが行われる年に当たりますが、令和3年度からの新しい学習指導要領の実施に伴い、令和2年度、来年度になりますけれども、中学校が使用する教科用図書の採択がえを行う予定となっております。

このため、本年度におきましては、現在使用している教科用図書と同一のものを採択するものでございます。

続きまして、議案書の8ページをごらんください。高等部につきましては、特別支援学校高等部用の教科書目録が作成されていないため、文部科学省発行の令和2年度使用「高等学校用教科書目録」から、学校における調査研究に基づき、検定済教科書を採択するものでございます。

次に、「議案第33号 令和2年度使用特別支援学校小中学部及び小中学校特別支援学級教科用図書の採択について(学校教育法第34条第1項文部科学省著作教科書)」でございます。

こちらは、文部科学省発行の令和2年度使用「特別支援学校用小・中学部教科書目録」に登載されております教科用図書を障害種別、小中学部別に一覧にしたものでございます。

議案書の1ページをごらんください。主に聴覚障害の児童生徒が使用いたします。上の表は、特別支援学校小学部及び小学校特別支援学級において、言語指導を行うための教科用図書でございます。下の表は、特別支援学校中学部及び中学校特別支援学級において、言語指導を行うための教科用図書でございます。

議案書の2ページをごらんください。主に知的障害の児童生徒が使用いたします。上の表は、特別支援学校小学部と小学校特別支援学級用の教科用図書でございます。下の表は、特別支援学校中学部と中学校特別支援学級用の教科用図書でございます。

知的障害を有する児童生徒の障害の程度は、一様ではないために教科用図書の学年指定は弾力化され、星印の数で学習内容の程度をあらわしております。

次に、「議案第34号 令和2年度使用特別支援学校小中学部及び小中学校特別支援学級教科用図書の採択について(学校教育法附則第9条教科用図書)」についてでございます。

学校教育法附則第9条教科用図書は、児童生徒の障害の程度が多様であり、教育課程も特別であるため、選定に当たっては、文部科学省発行の「令和2年度用 一般図書一覧」と神奈川県教

育委員会作成の「令和2年度使用 神奈川県立特別支援学校採択教科用図書 調査研究資料」を参考に、各学校で十分な調査研究を行い、教科の主たる教材として教育目標の達成上、適切な図書を採択するものでございます。

次に、「議案第35号 令和2年度使用特別支援学校高等部教科用図書の採択について（学校教育法附則第9条教科用図書）」についてでございます。

議案の1ページをごらんください。議案第34号と同様に、各学校で十分な調査研究を行い、教科の主たる教材として教育目標の達成上、適切な図書を採択するものでございます。

以上、令和2年度に使用いたします、特別支援学校及び特別支援学級の教科用図書の採択について御説明いたしました。御審議のほどよろしく願います。

【小田嶋教育長】

ただいま、議案第32号から議案第35号までについて、一括して説明をいただきました。何か御質問等がございますでしょうか。

中村委員。

【中村委員】

議案第34号の資料が分厚いのは、お子さんにあわせていろいろな教科書を選んでいるからということ、今までの採択で教えていただいたんですけども、具体的に、どのように取り組まれて本を選んでいらっしゃるのか、特に川崎で大事にしている点とか、丁寧にしている点について、教えていただけないでしょうか。

【小田嶋教育長】

では、指導課担当課長、よろしくどうぞ。

【稲葉指導課担当課長】

特別支援学校や特別支援学級が教科書を選定する上で、一番大切にしておりますのは、一人一人の障害の状況や教育的ニーズが、それに的確に応える教育を行うということが大切でございますので、そのことから、個別の指導計画の作成に本市としては力を入れているところでございます。

この個別の指導計画の中で、児童生徒一人一人の教育的ニーズを把握して、学習の内容や目標、手だてなどをつくってまいりますので、児童生徒が使用する教科書がこの個別の指導計画の目標達成において、可能な限りそれらの内容に即したものを各学校で選ぶようにいたしております。

具体的には、担当教員が教科書展示会等で実物を見ながら、また書店等に行って実際に見たりもいたしますが、そのような上で校内でも検討会などを行っておりますのと、それから、学校内で通常の学級と交流及び共同学習なども行っておりますので、そのような点にも配慮し、さらに保護者との情報共有も確実にいながら、各学校において教科書の選定を行っているところでございます。

【小田嶋教育長】

ありがとうございます。

よろしいですか。

ほかに御質問等は。

高橋委員、どうぞ。

【高橋委員】

個々の教育ニーズに対応して、幅広い図書を選んでいただいている、本当にありがたいと思っております。

ざっと見させていただいて、昨年度のこの一覧表と共通するような図書名も拝見したりしたんですけども、普通の教科書、一般的に教科書は学年が上がって配付をされるという形で来るわけですけども、この第9条教科用図書というのは、新しく一年一年購入しているのか、例えば、学校の図書室とか資料室にあるようなものを供用して使っているようなものなのか、そのあたりを教えていただければと思います。

【小田嶋教育長】

よろしくをお願いします。

【稲葉指導課担当課長】

この附則第9条分の一般図書でございますが、基本的に同じものを一人の児童生徒が、同じものを、次の年も同じものを採択するというものはありませんので、お子さんの成長の状況を踏まえて違う本を選んでいくということになります。

それから、御質問の内容、集団で学習を行う上で、同じ教科書を使用したほうが学習しやすいというような場合もありますので、そのような小集団での学習の形態などにも配慮しながら、教科書のほうを選んでいただいております。

【小田嶋教育長】

よろしいでしょうか。

【高橋委員】

毎年新しく用意しているのか、学校にあるものも活用しながら使っているのかというところでですね。

【稲葉指導課担当課長】

義務教育については、毎年新しいものでございます。

【小田嶋教育長】

ほかにはよろしいですか。

では、採決に入りたいと思います。

まず、議案第32号について、原案のとおり採択してよろしいでしょうか。

【各委員】

<可決>

【小田嶋教育長】

では、議案第32号は、原案のとおり採択いたします。

次に、議案第33号について、原案のとおり採択してよろしいでしょうか。

【各委員】

<可決>

【小田嶋教育長】

それでは、議案第33号は、原案のとおり採択いたします。

次に、議案第34号について、原案のとおり採択してよろしいでしょうか。

【各委員】

<可決>

【小田嶋教育長】

では、議案第34号は、原案のとおり採択いたします。

次に、議案第35号について、原案のとおり採択してよろしいでしょうか。

【各委員】

<可決>

【小田嶋教育長】

それでは、議案第35号は原案のとおり採択いたします。

1 1 閉会宣言

【小田嶋教育長】

本日の会議は、これをもちまして終了いたします。どうもお疲れさまでございました。

(15時06分 閉会)